
とある科学の不可領域《オーバーライン》

黒澤和也（刻駆）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の不可領域^{オーバーライン}

【Nコード】

N5342U

【作者名】

黒澤和也（刻駆）

【あらすじ】

学園都市の『闇部^{あんぶ}』。

^{オーバーライン}

そこに、不可領域と呼ばれる少年が存在していた。準第一位と評される能力を手に、彼は物語を描く――。

科学サイドが中心。とあるいぬまる様のキャラの能力とまったく同じっぽい（パクリと言われても仕方ないが前から考えてた能力なのよね）能力ですが、あの方の能力とは違うのでそこら辺言われても何も言わないので。

ベッタベタな、暗部系の話です。

i リメイク(?) (前書き)

久方ぶりに書きました、とあるの二次です。

小説の前書きにも書きましたが、とあるいぬまる様の能力と酷似してます。

反物質、中間子レーザー、光子反射——ですが、それだけであって根本的に全然違います。

言い訳に聞こえるでしょうが、この能力は中学三年の初期に電子辞書やネットを駆け巡り考えた能力で、ここ最近それをさらに改変したものです。

なので、感想などでその事を言われても何も反応しませんので——。

リメイク版。

といっても、前とあまり変わらないww

#・1 リメイク(?)

宵闇よいやみの中——白に近い灰色の髪が黒一色の中で色を灯す。鬱陶うつとうしげに虚空を見つめる不気味すぎる赤、紅、朱あかの瞳が細められた。柔らかな夜風に髪が揺られる。少年は右手に握り締める上下スライド型の携帯を耳に押し当てながら静寂が漂う、不気味な暗路地を歩いていく。

チャック式で全開にされたベストの裾がゆれて、季節外れの灰色のロングTシャツが風の抵抗を受けて波を打つ。ぶかぶかの黒のパンツを強引に縛り止める前面が大きく開いた運動性を重視した左右にスリットの入った同色の腰巻。レザースニーカーの踵が地面とぶつかる度に、音を奏であげる。

「……判つてんだよ。そんな事ぐらいよお、結局は目標を潰しちまえばいいって事だけだろうが」

『確かにその通りだ……期待してるよ、不可領域オーバーライン』

不可領域オーバーラインといわれた少年は、両手に嵌めたフィンガーレスの手袋を嵌めなおす。そして、携帯をポケットの中へと無造作に突っ込むと加速した。

右足が地面に触れた瞬間に、一瞬だけ閃光が弾けた。それと同時に、不可領域オーバーラインは爆発的な加速をする。

暗路地を一瞬で突き抜けて、大広間へと出る。

そこにあるのは、巨大な廃工場と、出入り口を閉ざす巨大な鋼鉄の扉。

その中から聞こえる下種な笑い声。

不可領域オーバーラインは、熱したチーズを引き裂いたかのような笑みを浮かべながら、その鋼鉄の扉の前へと歩いていき立ち止まる。

「んじゃ、楽しい楽しい仕事の開幕だ……ハハハ——」

笑い声を溢しながら少年は、右手を扉へと置いた。

「——ヒヤハハハッツッ!!!!!!」

黒尽くめの男たちを包む優越感が、突如響く狂笑により掻き消された。

いきなり、風が男たちの頬に当たる。声と風のする方向を見れば、大人が五人掛からなければ開かない様な重厚さを感じさせる鋼鉄の扉に、成人男性大の穴が音もなく開いていた。

そのあいた空間の真ん中に右手を突き出している一人の少年――
――
不可領域が存在していた。灰色のロングTシャツに、全開にされたチャック式のベストに、ぶかぶかの黒のパンツを縛り上げる腰巻というあまり変哲のない服装をした灰色の髪少年。

だが、少年の顔にはその端正な顔とは不釣り合いな不気味な笑みが広がっている。

不可領域は、拳銃を手にながらもまだ状況の整理が追いつかぬ男たちに向かい右手を下ろさずに口を開く。

「反応は上出来だな、さっすがプロの暗部組織の人員共だ」

口笛を吹きながら賞賛する不可領域。
不可領域の言った言葉をよく咀嚼し飲み込んだころには、仲間であるメガネの長身の男の顔が不可領域の右手から現れた一筋のレーザーにより消し飛ばされていた。

男たちの後ろで、ズギヤツ！！ という壁が強引にえぐられた音がする。

それと同時に、男たちはすぐに引き抜いていた拳銃を不可領域へと向け、照準をつけたと同時に発砲を行う。

タンタンガンッ！ という、乾いた音が連続する。

無数に飛来する弾丸を眼前にしながら不可領域は、余裕を絶やさない。

なぜならば――

「残念だなあ三下…… そういったモンの類は俺には効かねえんだわ」

――己の能力に絶対的信頼を置いているからだ。

不可領域に容赦なくぶつかる弾丸。

誰しもが予想していた。無数の弾丸は少年の華奢な体を蜂の巣に

して、ただの肉片に変えてしまう——と。

だが、弾丸が当たった瞬間に消失した。

音もなく、少年の生命を掻き消し、肉片に変えるハズの弾丸が消えた。それと同時に、不可領域オバラインの体が沈み——手短にいた男の顔を掌で掴み、地面に叩きつけた。

不可領域は高速移動による推進力を味方につけた、推進力というベクトルを真下にたたきつけるというベクトルへと変えて、コンクリート製の地面に男の後頭部が突き刺さり、陥没させる。

「さつてとお……死にてえ野郎から来いよ。跡形もなく消し飛ばしてやる」

不可領域オバラインの言葉を引き金に、一人の男が隠していたナイフを握り締め、不可領域へと肉薄する。

それを見て、不可領域オバラインは、そっかそっか……と、何の気なしに呟き、続ける。

「射撃は無理だから、近接は行けると思ったのか……ダメだよなあ、勝手な自己解釈されちゃ困るんだよなあ。だからお前らはさあ？」

——何時まで経っても地面這い蹲つくばってしか生きられねえウジ虫なんだよ！！

不気味な笑みが掻き消され、不可領域オバラインが苛立ちを含んだ声で咆哮した。

不可領域へと突き刺さるハズだったナイフの刃は消えてゆき、男の握る柄さえも吸い込まれる様にして消える。

驚愕しかない男の顔を右手で驚掴わしづかみすると、不可領域は先ほど地面に男を叩きつけた様に、自分の体重を乗せて地面へと叩きつけ——閃光が迸はなはつた。

一瞬の網膜を焼く様な閃光に男たちは目を両手で覆う。そして、両手を退けた不可領域を見れば、叩きつけられた男の首から上が消失し行き場を失った鮮血が溢れ出る。

不可領域へと付着するハズの鮮血は、それさえも拒む様に消されていく。

「ヒヤハハハツツ……！！ 愉快に素敵に消し飛んじまったぞ！
！」

先ほどまでとは一変。

元々、鋭かった眼光は研ぎ澄まされた刃のように鋭利さを増す。

その瞳に、獐猛な獣を飼っているかの様な錯覚を男たちに覚えさせ

—— 殺戮が始まった。

とある科学の不可領域

殺戮の果て—— そこには、鮮血が散らばり鼻をつく異臭と、不可領域に睨まれ強張る男の姿があった。

震える口の筋肉を叱咤して男は聞いた。

「て、メエ…… 何の為に俺たちを消しに来た……！！」

「何の為だ？ ふざけてんのかお前？」

—— そんなモン決まってるんだろ？

男の質問に、そう続け不可領域は容赦なく告げる。

「上層部がお前らが必要としなくなったからに決まってるんだろ？

お前ら、必要な時に必要なモン買って、要らなくなったらゴミ箱に捨てんだろ？ それと一緒にだよ」

絶望した。

「—— 最初から、俺たちは必要とされてなかったって…… 事、かよ」

「その通りだ。もしかして期待してたかあ？ もしかすれば、上層部に気に入られて上に上り詰めれるってよお？」

男の考えすべて、一から十までだとするならそのすべてを根本的に否定し、粉碎する不可領域の言葉は今まで存在していた男の存在意義をすべて壊し、絶望を抱かせる。

男は、自分がこれから殺されるという事、そして上層部は元より

自分たちを必要としていなかった事を理解すると一度だけ目を閉じ、再び目を開けて少年にもうひとつだけ聞く。

それは、先ほどから気になっていた事。

—— コイツの能力は……

「テメエの、能力は何なんだ？」

「あ？ 死ぬ間際にそんな事聞いてどうすんだよ、もっと無様に縊^{すが}り付けばいいモンをよお」

ま、別に構わねえがな——、そう言いながら灰色の髪を右手で梳^とかしながら不可領域は告げる。

「俺の能力は、分子レベルでの加速・固定を行ったり、物質・物体の質量や密度、性質などを任意の形に変えたり、はたまた自分に襲い掛かる物質などを反物質へと構築し消滅させる事ができる。消滅させたやつから、中間子を取って中間子レーザーを打ち込んだり——電子など粒子を操作して実用化されてねえ荷電粒子砲を撃つたり出来る。ほかに、人間の体を反物質に変えて消したりも出来るぜ？」

—— まあ、まだ色々あるけどなあ。

オバーライン
不可領域の能力は、最初から勝ち目が無いという事を叩きつけ、さらに深い闇^{うみ}へと男を落とす。

「……なんだよ、それ」

—— 最初っから、俺たちに勝ち目ねえじゃねえかよ……

思考は、一瞬で体中を巡る。

それを見ながら不可領域は、紅眼を細めながら不愉快そうに、興味のないように

「かの、学園都市第一位の一方通行様は『反射』がデフォだがな。

俺の場合は、自分の当たったモンを反射じゃなく反物質に変えて消失させちまう『消失』がデフォなんだよ」

それだけ言う。

フィンガーレスの手袋の布地から露出した細く白い指を開きながら男の顔面へと手を翳^{かざ}し—— 死の閃光が瞬^{まばた}いた。

「これで十分だろ？　じゃあな——安心して死んで来いよ」

オーバーライン
不可領域の声を鼓膜に焼付け、網膜に不可領域という絶対的な存在の恐怖を焼き付けて意識が暗闇に落ちた。

男が死ぬ様を無表情で見届けると不可領域は、携帯を取り出し男へと通話を掛ける。

数コール鳴り響き、男の声が聞こえた。

何回聞いても、耳の奥、鼓膜よりその先に粘着するような妙に低い苛立たせる声。

『終わったようだな？』

「当たり前だろ。俺が万が一でも失敗するとも思ってたのか？」

『いいや？　ただの確認作業だ……ま、成功するのは必然と思っ
ね。もう報酬は振り込んである』

「ふうん……で？　他に何かあんだろ？」

参ったな。バレてたのか？

男の声を聞きながら、いったい何年前からお前と一緒になんだよ。と、声だけしか聞いた事のない男に内心で悪態をつく。

『まあ、話がスラスラと進むからいい。『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画は知っているか？』

『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画——。

超能力者（レベル5）である超電磁砲^{レールガン}を百二十八人を殺す事で超能力者（レベル5）という領域のさらに上、絶対能力者（レベル6）に到達するといわれる計画。

だが、もちろんの事。超能力者（レベル5）である超電磁砲^{レールガン}を百二十八人も用意する事は不可能。

そこで、同時期に進められていた超電磁砲（レベル5）の量産計画^{システム}『妹達』に着目。本家の超電磁砲とは性能が異なる妹達の能力は、多めに見積もっても強能力者（レベル3）程度。

これを用いて、『樹形図^{ツリー}の設計者^{ダイアグラム}』に再演算をさせた結果が、二万通りの戦場と、二万人の妹達^{システム}を用意する事で、超電磁砲^{レールガン}を百二十八人殺す事によりもたらされる結果と同じという事がはじき出され

た。

それにより行われたのが、非人道的な実験——それこそが、『絶対能力進化（レベル6）』計画。

『その通り……そして、実験の対象である一方通行を使つての実験だ……だが、ここからが問題だ』

「問題だあ？ 意味判んねえな、もしかして、一方通行はまさかの敗北を喫し、実験は中止。凍結つてかあ？」

「……」
「……オイオイ、マジかよ」

男の無言は、肯定を示した。

「不可領域は最強とされる一方通行を羨んでいた。絶対的な力を持つて、相手を敗北させられる能力を持つ一方通行が羨ましくて仕方がなかった。」

「だから、一方通行に近づけるなら何でもした。一步でも近づこうとした——そして、不可領域ではなく一方通行に訪れた『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画を聞いた時、羨望が憎しみに変わった。」

なぜ、俺じゃない。俺は、アイツに近づく為に何でもしたんだ——これじゃあ、意味がねえじゃねえか。

そして、今、その一方通行の敗北を聞いた。
俺が渴望し、望んでいた能力を持つ一方通行は弱かったのか？突然浮かぶ疑問を消すように男の粘着質な声が響いた。

「つい、一時間前の話だ……それも無能力者（レベル0）によってな」

「……オイオイ、あの一方通行が能力も持っていない無能力者にやられただあ？ ヒヤハハハッ！！ 傑作だなあ、オイ！！」

「——そこで、だ。お前に大きな仕事が回ってきた」
それは、不可領域の運命を大きく変える仕事。

灰色の髪を掻き揚げながら、紅の瞳が徐々に細く細く不気味に光を灯し始める。

オーバーライン
不可領域は薄く薄く、不気味な笑みを浮かべ、

「上等だ…… やってやるうじゃねえか」

仕事内容を聞き終えて、携帯をポケットへとしまふオーバーライン
不可領域の狂笑が廃工場の建物に響いた。

三日後、早朝五時。

人気のない通称『寂れてしまった学区』——第十九学区の一角。
早朝特有の冷気が肌を刺し、穏やかな風が髪を撫でる。

ポケットに手をつ突っ込んだまま、オーバーライン
不可領域は廃墟の屋上に座り込み、路地を見下げる。

そこには、いくつものバードスーツ
駆動鎧の姿が立ち並んでいた。

搭乗しているのは暗部構成員の下部組織の連中だ。オーバーライン
不可領域が待

ち望む『大きな仕事』の前に残つてある仕事の片付けの時間。

名も知らない、暗部組織がバードスーツ
オーバーライン
駆動鎧に乗り不可領域を殺そうとして
いるらしい。

その情報を、あの男から聞き動いている。オーバーライン
不可領域を殺そうとする暗部の連中は、ここ最近大きなヘマを起こしたらしく上の命令も聞かず苛立ちから来る破壊活動を行い、上層部の邪魔になっているらしく、破壊活動の先がオーバーライン
不可領域の殺害。

今回の仕事は、上層部の願いによる掃討と、オーバーライン
不可領域のありもしない安全確保のための行動から成り立つ。

報酬金額は、五百万らしい。

「——楽しい『仕事』を聞いてからどうも気分がハイになつちまう。ダメだわあ……気分晴らしに殺すか」

元々、仕事だから殺すのは当たり前なのだが。

屋上から跳びたち、右足に体重を思い切り乗せる。狙いは真下に
位置するバードスーツ
駆動鎧の一人。

「ハッアアイー！ ウジ虫共お！！」

高らかに挑発する様にして、不可領域オーバーラインが加速する。

不可領域に狙われる駆動鎧パワードスーツが気づいた時には——時すでに遅かった。

「……ッ！」

息を呑む音がしたが、不可領域オーバーラインは何の気なしに、真上から頑丈な装甲を蹴り碎き、二メートル前後ある駆動鎧パワードスーツを地面へとミンチ状にして縫いとめた。

一気に鮮血が地面を覆い、一瞬で血溜りが完成した。

駆動鎧パワードスーツに搭乗する一人が、装備していた不恰好なりボルバー式の対隔壁用ショットガンを放つ。

銃口から発せられる轟音が他の駆動鎧パワードスーツへの合図となり、ショットガンからまた音が吼える。

大きな弾丸が不可領域オーバーラインにぶち当たる。弾丸は、当たって一秒後に炸裂する炸裂弾。駆動鎧パワードスーツ達は、思い描いていた。

打ち込んだ弾丸によって、内部から破裂して絶望に彩られたまま絶命する不可領域オーバーラインという少年の姿を——だが、それは幻想ゆめにしか過ぎなかった。

「残念だったなあ……三下共？」

華奢な体に吸い込まれる弾丸は、当たった後消滅——そして、少年の口角が薄く裂けた。

剃刀カミソリのように薄く、それでいて鋭利な刃を思わせる笑みに邪悪が張り付く。

「華々しく散らせてやつから——光栄に思え」

刹那、ギュバッ！！という空気がはじける音が鳴り響き、閃光が駆動鎧パワードスーツを飲み込んだ。

声を出す暇すら与えない。

不可領域オーバーラインが行ったのは、極太の中間子レーザーを放つだけの作業。瞬く間に、駆動鎧パワードスーツの装甲を悉く貫き破壊し、駆動鎧パワードスーツを駆る者達に終止符を打った。

「ヒヤハハハ……ああ、つまんねえな。『仕事』が楽しみすぎてつ

まんねえわ……」

そう呟き、ポケットへと手をつ込み、路地を後にした。
残り三日——
超能力者^{オバーライン}と無能力者^{ヒーロー}の交差する時は近い。

1 リメイク(?) (後書き)

ここまでの読了ありがとうございます。

次回、不可領域は皆さんの大好きな人と接触し、戦闘を起こします。

で、戦闘終わるまで書き上げてますので、これの後にすぐ投稿します。

では、これからもよければ読んで頂けたら幸いです。

(7/18 16:12リメイク)

2 リメイク(?) (前書き)

前回の続き。

今日と明日などで続きをどんどん書いて行きたいと思います。

#・2 リメイク(?)

夜が深くなるにつれ、徐々に鋭さを増してきた冷氣が、白に近い灰色の髪を夜風に揺らす不可領域オーバーラインの白い肌を刺す。

仕事を言われてから一週間が経った。

仕事内容は一方通行を倒した無能力者ヒーローの力量を測る事。
アクセラレータ

だが、不可領域オーバーラインにその気はない……『測る』だけであって『殺す』
な』とは言われていない。

つまりそういう事だ——不可領域オーバーラインは無能力者を殺す。

不可領域オーバーラインがあるのは、列車の操車場。今回の実験場であり、一方
アクセラレータ
通行が敗北した場所。

路線バスで例えるならば車庫に当たる。たくさんの電車を整備したり、終電を走り終えた列車を置いておく場所。学校の校庭ほどの広さの大地には線路と同じような砂利が一面に敷き詰められ、十本以上のレールが平行に並んで、路線の先には貸し倉庫の様な、大きなシャッターのついた車庫が並んでおり、操車場の外周をぐるりと取り囲むように、積み木のごとく積み上げられた金属コンテナが存在する。

と、いつても……そんな操車場のレールの一部が地面に突き刺さっていたり、コンテナが崩れたのか、地面が抉れていたりとしている。

これは、つい最近行われ、そして終焉を迎えた『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の爪痕。いまだ、修復しきれていないところを見ると、修復にまわす人員が足りないのであろうか。

ぐるりと、操車場一体の地理を頭の中へと詰め込む為に一周回ってきた後に考える。

そんな中、金属コンテナがおかれた間から一人の少女が出てきた。肩で切りそろえられた赤みがかった茶髪。整えられた容姿、半袖ブラウスの上にサマーセーター。膝丈のプリーツスカートという名

門、常盤台中学の制服。内情を知るモノはその少女を学園都市第三
位、超電磁砲——御坂美琴だ、と言うだろう。

だが、本人と違う点が二つ。

ひとつ、額に掛けられた軍用ゴーグル。二つ、両手で抱えるライフル——F2000R『玩具の兵隊』を持っているという事。

そこから、生み出される答えは『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の実験対象である、第三位のクローン——妹達という事であった。

とある科学の不可領域

「残念だったなあ……ようやく、平穩が取り戻せたハズだったのに
よお？ 付いてねえよなお前」

「ミサカは単価十八万円で生み出されるお姉さまのクローンですの
で、ミサカ達にそもそも平穩なんてモノはありません、とミサカは
貴方の言葉を訂正します」

「ああそう……しかし、一週間どう過ごしたんだお前ら？ 一方
通行をぶっ飛ばした無能力者（レベル0）に体で感謝したのかあ？」
「ミサカは体の調整の為、研究所ですつと過ごしてました、とミサ
カは今までの過ごし方を暴露します」

不可領域は、ふうんと、つまらなさそうに言いながら夜空を仰ぎ
見る。

点々と、星が浮かび上がり何とも綺麗な光景を映し出していた。
それを視界に納め、目を閉じ——ゆっくりと、顔を御坂妹へと
向けて不気味に光る紅の目を開いた。

そこには、今まで以上に眼光を鋭くさせ獲物を狩ろうとする狩人
の姿。

「午後八時三十分——これより第二次『絶対能力進化（レベル6
シフト）』計画を始めます」

言葉と同時に、御坂妹が走る。

——コイツと戦ってれば無能力者（レベル0）のヒーローが来るんだ。それまでの余興だ……

正直言つて、一方通行を倒した奴と戦う事が楽しみで仕方なく、さらに、自分が絶対能力（レベル6）となり一方通行の求める『無敵』を自分が手に入れる事が出来る。それは、強さを求め続け、殺人が存在意義である不可領域にとつて最高の出来事でしかない。

これから、楽しい事が始まる——そう考えただけで顔がニヤける。

いつの間にか、十五メートル程御坂妹と距離が開いていた。

そして、気づく——自分の眉間にF2000Rの照準が向いているということに。

ガアンツ！ という、撃鉄を叩く音。音を追い抜いて、眉間に当たった弾丸は消失する。

「——ツツ！？」

御坂妹の顔に驚愕の色が見えた。

「弾丸が消えた？ どういった能力ですか？ ……と、ミサカは驚愕をあらわにしながら分析します」

「おせえんだよ三下ア！！！」

飛びのきながら、射撃は無意味と悟り、用無しとなったF2000Rを放り捨てて地面を蹴って距離を開けていく。

だが、その距離を一瞬で不可領域は吼えながら詰めた。

足元での、光子反射——それにより、光子の持つ運動エネルギーを使い急速な勢いでその距離を詰めたのだ。

御坂妹の真横へと位置すると、右足を振り上げて御坂妹の顔面を蹴りぬく。

すさまじい速度で放たれた蹴りは、御坂妹の想像を切り裂く。

「がつ……ぐ、うう！？」

数メートル蹴り飛ばされ、地面に叩きつけられバウンドする。背中から衝撃が肺へと突き抜けて、吸い込んだ空気が外へと強制的に吐き出される。

（いきなり加速した……？ と、ミサカは驚愕を心中で吐露します）
冷静に、ズキズキと痛む顔を右手で抑えながら分析する。

なぜ今——オーバーライン不可領域は加速した？

「おーおー……愉快的顔しやがって、訳も判らない様だな？」

分析しても答えが出ない御坂妹へと、不気味な笑みを浮かべたま
ま答えを告げる。

「今のは、足元にある光子を反射しただけだ。光子は常に運動エネ
ルギーを持つて、それを反射する事によって推進力を得れるって
訳だ」

そう説明しながら、オーバーライン不可領域は鼻腔びこうを突く異様な異臭に右手を口
元に押し当てる。

（何だ？ 息がし辛いだと？ ……オイオイ、まさか酸素をオゾン
に変えるなんてなあ……だけど——）

思考。

オーバーライン不可領域の灰色の髪と紅眼が揺れ、口元が裂けた。

「——甘いよなあ、そんなんじゃ全然ダメ何だわ……一方通行に
対してこの戦法はいいだろうが、俺には全くの無意味なんだよ」

「どういう事ですか、とミサカはオゾンを吸い込み続けるアナタを
見ながら呟きます」

酸素を無理やりオゾンへと変えた——それは、有害な物質を取
り込み続けているという事。

だが、その有害な物質は体内で反物質に変えられる——ゆえに
何の意味も持たない。

それでも酸素は減少の一途を辿っているのは確か——と、そこ
まで御坂妹が考え先ほどまで嗅覚を突く異臭が消えた。

「残念でしたあ！ 俺の本質は物質操作、ありとあらゆる物質を違
う物質に変換したりするモンでなあ？ 電離したオゾンをもう一度
酸素に変えたんだわあ」

懺悔さんげを請う迷える羊に告げる如く、オーバーライン事実をハッキリと告げてから
跳躍。途端、何もない空中に不可領域が立った。

「……今のはどういう原理ですか、とミサカは説明を促します」

「ハアン？ 空気中過半数以上を占める窒素を炭素に換えて硬質化させて足場を作っただけだぜ？ —— 当然、こういう事もできるんだぜえ？」

忽然と、オーバーライン不可領域が落ちてくる。その前方には無数に煌く鉱石。純度が高く、光を反射させるもつとも硬質な鉱石。『外』の世界では億は下らない鉱石——ダイヤモンド。

この学園都市で、ダイヤモンドは炭素から作り上げられるため大量生産されているゆえに価格は『外』の十分の一程度で済む。

そのもつとも硬質な鉱石が、加速して御坂妹の体を激しく打ち付ける。

「ぐ、がつぎい！？」

筋肉などを通り越して、骨が軋むような痛みが御坂妹を襲った。

地面に転がり、苦痛を歯を食いしばり我慢し、回避行動を取ろうとする御坂妹へと無情にも不可領域は光子加速を使い肉薄し、華奢な右肩へと己の左手を突き当てる。

「ぶっ 飛べ」

言葉と共に、左手から閃光が迸り御坂妹の右肩を細い閃光が貫いた。

「あ、ぐっ！？」

錐揉み回転しながら、汚い地面へとぶつかり、再度呼吸困難へと陥った。

痛みに呻き御坂妹は、左肩を右手で抑えながら少しでも遠くへと距離を開けようとして、その端正な顔を踏みにじられた。

「ハッ…… 余興も終わりつてか？ さて、最後に問題を出してやる」

「……？」
「俺は今、お前の顔を踏んでいます。このまま能力使ったらどうなるでしょう？ ヒント——俺が高速移動した時用いたモノは何だったあ？」

ニヤニヤと、絶えず笑みを浮かべる不可領域の言葉をよく頭の中

で咀嚼^{そしゃく}し、飲み込んだ時点で思い出した。

—— 今のは、足元にある光子を反射しただけだ。

（まさか……ミサカの顔を踏みにじった状態で光子を反射……）

そこまで考えて不可領域^{オバライン}が思考を遮^{かえぎ}った。

「答えが出た様だな……その通りだ。光子の束をこの場で地面向かつて反射する事で——お前の、その愛らしい顔はミンチ状に潰れちまうって訳だ」

—— まあ、お前の顔を反物質に変えて消し飛ばせるけどなあ。そこまで言って、不可領域^{オバライン}は今までの笑みとは打って変わり、どこか後味の悪そうな顔をする。

それは何故か——限界が来た御坂妹が気を失ったからだ。

それを見て、舌を小さく打つと呟く。

「——じゃあな」

少しだけ、右足を持ち上げて振り下ろそうとした瞬間^{アクセ}——一方^{ラレタ}通行を打ち破った無能力者が舞い降りた。

「——御坂妹から離れる!!」

「……ヘエ。お前が例の無能力者^{ヒーロー}か……はっじめましてえ！俺は不可領域^{オバライン}——」

重力に逆らったツンツン頭。平々凡々な顔に、中肉中背の半袖ワイシャツとスラックスに身を包んだ少年。

待ち望んだ無能力者^{ヒーロー}を見て、不可領域^{オバライン}は高らかに自己紹介しようとして、

「ぐだぐだ言ってねえで離れろって言ってるだろ!!! 三下ア！

」

「——ああ？」

遮られた。

待ち望んだヒーローが来て気分がハイになっていたというのに、

苛立った。

天下の超能力者（レベル5）である不可領域オバーラインに対して、三下、と言った無能力者（レベル0）に対して。

「あー、ハイハイ……離れてやつから少し黙っとけ」
そういいながら、御坂妹から離れる様に。少年、上条当麻かみじやうまに近づくようにして距離を取る。

御坂妹から約二十メートル。上条まで約八メートル。

光子反射すれば一瞬で詰められる差だ。

「さて、と……一体お前は何しに来たんだあ？ まさか、実験を止めてやるとでも思ってたか？」

事実、不可領域オバーラインはなぜ来たのか知っている。

あの男が、この情報を御坂妹のオリジナルに回る様にして情報を流し、オリジナルが上条に頼むという。

すべてシナリオ通り。

知っているがゆえに、敢えて疑問を投げかける。

「当たり前だろ……何と言われようと、俺はそこにいる御坂妹や御坂達を助けてやるって約束したんだ」

「ハン……ほざいてる三下。どうせ、一方通行も度重なる実験のせいで疲れてたんだろ。それを倒したってだけじゃねえか……お前が勝てたのは偶然だよ、偶然。判るか？ 護るのも、奪うのも全ては力だ……お前にはそんな力はねえんだよ」

どこまでも、全てを否定し不可領域オバーラインは下手くそなシナリオの元、ベッタベタな展開を繰り広げる映画を評価するように、心底下らなさそうに告げる。

「テメエが弱いつて事を証明してやるよ」

「——その前にひとつ聞かせろ。この実験は止まったはずだ、何で繰り返されてるんだ」

「ハア？ そんなもん、『止まった』だけだろ。俺みてえな奴がいれば『繰り返す』のは必然だろおが」

小さい子供が、一度ダメだと言われた事を、好奇心からもう一度

行ってしまうのと同じ。

オーバーライン
不可領域は諭すようにそういうと、質問は終わったか？ と、促す。

「じゃあ、後ひとつだけ聞かせろ……お前は何でこんな実験に加担してるんだ」

「そんなもん決まってるだろ——俺の進歩の為だ。実験つーのは、現状から進歩する為に繰り返しされる。だから、俺が繰り返ししてるんだよ……御坂妹こいつを使ってるな」

「——お前の、進歩の為……だと？」

当たり前じゃねえか、そう言うように笑みを絶やさず上条を睨む。
それに怖気づく事なく、上条は告げた。そこには、オーバーライン
不可領域の台詞を聞いた為か声音に苛立ちが含まれたまま。

上条が告げるのは、一方通行も同様の事だった。

「判った……ハッキリ言ってるよ。そんなじゃ俺には絶対勝てない」

「……んだと？」

ブツツという音を立てながら青筋が立った。

もうダメだ、我慢できない。

怒りという本能が爆発した。

「吼えてんじゃねえぞ——三下アアああああああッッ
!!!!!!」

一瞬で上条との間合いが詰まる。

刹那、手前で急停止し、踵を地面へと叩きつける。砂利が舞い上がる。それを全て消失させ中間子を取り出す。

「——ッ!？」

上条が気づくが、取り出された中間子を一本の筋へと変えて放つ。中間子レーザ——使い慣れた公式を利用し、閃光が弾ける。運良く、それを避けるがすでに不可領域は上条の懐へと肉薄していた。

「ぶっ飛べよ三下——!!」

鳩尾目掛けて、光子反射により加速した膝が飛び上がる。

「ぐっ……ばおっ!？」

急所に入った一撃は、上条を地面から数センチ浮き上がらせた。

「ヒヤハハハッ!！」

そのまま右手を振るっただけで、近くの風を一気に加速させた烈風が上条の体を攫い、手身近にあった鋼鉄のコンテナへと叩きつける。

「ぐ……ふうっ!？」

こみ上げる血を吐き出し、ずるずるとコンテナから滑り落ちる。無くなった酸素を必死に体内へと送り込みながら、立ち上がる。既にガクガクと震える膝を叱咤し走る。

「オイオイ、さっきまでの威勢はどこに消えたんだゴラァ!！」
辺りの中間子を一気に加速させる。

右手を突き出した瞬間、中間子レーザーが解き放たれた。

上条の視界がまばゆい閃光につぶされ――

「う、あああああああッ!!!！」

――振るわれた右手により閃光が消えた。

「……は？」

ポカンと、啞然とする不可領域。

（余裕がまし過ぎて、アイツの手前で消えたか……俺とした事が）
そう思い直し、光子反射により一気に上条へと肉薄する。

――右手でアイツに触れりゃ、そこで終了だ。

内心で、呟きながら触れた瞬間、反物質を構築できるように最初から公式を組み立てる。

完了した時には、上条との差はすでにゼロ距離――白色素の薄い右手を伸ばす。

「ッあああ!！」

声にもならぬ声で、上条が吼えて右手で不可領域の突き出す手をはじいた。

「……何だと？」

そして、そのまま上条の右手が唸りを上げた。
ガゴオンッ!!
轟音と共に、不可領域オーバーラインの思考が一瞬飛んだ。

(……月? オイオイ、今は実験中だろ……何で月なんか見てんだ?)

不可領域オーバーラインは考えていた。

なぜ、自分は今月なんか見ているのか、と。そして、頬辺りから伝わる温かい液体に気づき、右手で触れる。

「……血、だとおおおお!!?」

驚きと痛みに顔を顰しかめながら咆哮する。

立ち上がってみれば、右手を振りぬいた状態で啞然とした表情で佇たたずむ上条——そして、その顔が勝機の表情へと変わるのを不可領域インは確かに捉えていた。

(右手に集中し過ぎて、『消失』が切れてたか……次は絶対ない) 今度こそ……そう考えて、足元にある鉄骨の側面にある溝を軽く蹴り上げる。

「オラオラオラア!!」

一気に殴り飛ばす。触れた瞬間、光子を反射させる事によって急加速と共に上条を貫こうと鉄骨が飛来していく。

他の鉄骨も蹴り上げて、先ほどと同じように飛ばしていく。

声もなく、鉄骨は地面へと突き刺さり、土煙が巻き上がっていた。

「死んだか……?」

そう思い、あっけないな、と感想を漏らし御坂妹を殺そうと踵かかとを返し歩いていく。

だが、次の瞬間。

「うおおおおおおおおおッッ!!!!」

上条の声が聞こえた。

振り返ってみれば、不可領域オーバーラインの目の前で腰の回転を使い殴り飛ばそうとする上条の姿だった。

「チィ……ッ……!?!」

バックステップしようとして、頬を上条の右拳が捉えた。

真っ向から、地面へと叩きつけられ掛けるが、地面で光子反射して距離を取る。

「また、だと……ハハッ、いいな。愉快に素敵に決まっちゃったぞウジ虫野郎がああああ……!?!」

一気に右手を突き出し、跡形もなく中間子レーザーで吹き飛ばさうと考える。

急速に閃光が集まり、放つ——が、それはしゃがむという動作だけで回避させ思考が追いつかない不可領域オーバーラインの顎へと右拳が突き刺さった。

「何で——お前等みたいな奴に、あいつ等が食い物にされなきゃ行けねえんだよ……!?!」

嘆きにも近い、上条の叫びと共に不可領域オーバーラインが打ち上げられ、再度地面へと横たわった。

だが、それでも起き上がる。

「何なんだよその右手はああ……!?!」

両手を振り回し、上条を捉えようとする。だけどそれはむなしく空を切り、さらに胸部分へと拳が突き刺さる。

「ぐっ……調子乗んじゃねえぞ……!?!」

踵を叩きつけ、砂利を弾き上げる。

捉えた——そう思った。

だが、砂利の下から一気に鳩尾へと右手によるアップパーカットが叩き込まれた。

「ぐ、ぶうっ」

こみ上げる粘着性のある血液を吐き出した不可領域オーバーラインの顔面が上条の右手に包まれた。

思い切り地面へと叩きつけようと、途中で地面へと投げる。

それを感じて、不可領域はバカだと思った。

地面にぶつかった瞬間、光子を反射させて起き上がって攻撃しよう、そう考えて地面が体と接着しようとして光が瞬く。

「吹っ飛べ三下アアあああ……が、ぐうっ!？」

右手を伸ばして、中間子レーザーを打とうとした。

だけど、一度上条は右手を振りかぶっていて——勢いをつけて起き上がる不可領域の顔面へと右拳を突き刺した。

「——妹達だつて、人間だつて……人形じゃねえんだ。一生懸命生きてんだよ……ッ!!」

上条の悲痛な声が不可領域の耳に届いた。

誰かを殺す事は、何かを壊す事は全て自分が存在する存在意義の為だと言い聞かせてきた。

上の連中はいつも、仕事だと言って穢れた作業を俺にさせてきた。そして、いつもの様に決まった台詞を吐いてくる。

「キミが強くなる為だ」

その言葉は俺を奮い立たせる。

俺が強かったら、何でもできるから。何かを護る事もできるし、奪う事もできる——そしてひたすら俺がやってきた事は全部、人間を殺す事ばかり。

確かに、抵抗もしてきた。アイツ等から俺に掛かってきた事もあった……最初は、痛めつけて放置しただけだった。

なのに——何時からそんな裏に関わってもない奴らまで殺す様になった……

変な学者連中に思うように使われて、能力使って殺してきた。

俺は何を求めてた……？ 一方通行みたいな力？ 違う……それは、ただの言い訳に過ぎない。

——ああ、判った……俺が求めてたモノ……

それは——『存在意義』だ。

俺には何もなかった。能力に目覚めて、学者達が俺に目を付けた。莫大な金で親と引き取りられて、言われるがまま、当てもなかったから研究を行って、ただひたすらに殺人を犯して。

何もなかったからこそ、俺は気の狂った学者達に求めてたんだ……俺がアイツ等を喜ばせる事で、俺はアイツ等に認められるから。何時しかそれが——俺が存在するという意義になってたんだ……

（コイツを黙らしてやりてえ……コイツを立ち上がらせない程の力が……）

一気に風が集まった。

起き上がらない不可領域オーバーラインを見ていた上条の顔に疑問が現れ——

吹き飛んだ。

不可領域オーバーラインが右手を突き出した瞬間、集まっていた風が全方位に烈風となり吹き荒れた。

ガゴンッ！！

轟音を上げて、上条の体が風に吹かれたシャボン玉のように浮き上がり、高く積み上げられた鋼鉄のコンテナへとぶつかり、大きくコンテナを陥没させながら地面へと落ちる。

「クッ……ハハハッ、ヒヤヒヤヒヤギャハハハハッ！！！！」 オ

イオイ、何だよ何だ何ですかその様アア！！！！」

立ち上がり、白い右手を広げ突き出す。

「立てよ三下アア！！ 人の存在意義を最初ハナつから否定しといてその様はねえだろうがよおお！！！！」

右手を中心にして、辺りの電子を始めとする粒子全てを一気に加速させる。

そこに見えるのは、青白く発光し、バヂィッ！！ という炸裂音を響かせその場で帯電する一つの粒子。

その現象が呼び起こす風が灰色の髪を荒々しく撫でる。

「立て……オラア、華々しく散らしてやつから立ちやがれ無能力者
オオオおおお……！」

その叫び声を聞きながら、上条はふらつく足を叱咤し立ち上がる。
その瞳に宿るのは、屈服を知らない決意を宿した揺るぐ事のない
信念。

出血が激しく、視界が赤く染まっている。

膝がガクガクと震える。それでも、アイツと約束したから——
それだけあれば十分だった。

「ヒヤハハハッ……！ ぶち抜いてやらああ……！」
オーバーライン
不可領域が放ったのは——荷電粒子砲。

実現されていない、その一撃は超能力者（レベル5）である超電
磁砲を粉々に打ち抜く程の威力を秘めた一撃。

溜め込まれた加速され続けた粒子が、極太の光線となつて上条を
穿^{うが}つ為に突き進む。

ゴバアッ……！

空気が爆発したかの様な轟音を響かせ、一直線に二十メートルほ
どある距離を一瞬でつめる荷電粒子砲を目前として上条は、うつす
らと笑みを浮かべていた。

「安心しろよ、御坂——お前の周りの全て護つてやるから」
右手を振るつた。

パキイン——。

薄い氷を割つたかの様な音を立てて全てを穿つ最大にして最悪の
一撃は、右腕を振るうという何でもない、変哲の一つもないモーシ
ヨンによって打ち碎かれた。

壊されたと同時に爆風が吹き荒れる。

ガクガクと震える両足が攫われそうになる。それを気力だけで踏
ん張って立ち止まる。

「……何なんだよ……テメエエはああああ……！！！」

（一体何をしてんだよ、俺……）

咆哮とは裏腹に。

少年には絶対勝てないと、どこかで確信していた。

それでも、存在意義を否定された不可領域オーバーラインは止まらない。

でも、感じていた。

「お前が、誰かを殺さなくちゃ存在意義がなくなるって言うんだっ
たら、お前に教えてやる！！ その力を、誰かを護るために使えば
今よりもっと強くなれるって事を！！」

「吼えてんじゃねえ！！！！」

光子を反射する。

お互いの声がぶつかり合う。

一気に上条との間合いを詰めて両手を突き出す。

自分の意思で動き、不可領域オーバーラインの前にはだかる上条を羨ましく思い
ながら、

（色んな奴ら殺してきて……俺は何を得たんだよ……… ったくよお…

…自分から目を背けてばっかじゃねえか）

行動とは裏腹な思い。

瞳から透明な液体がこぼれた。

「——その大切な奴が、お前にとっての存在意義になるって事を
……」

上条の咆哮。

それを目にしながら、上条へと両手を叩きつけようとする。

（……ホント——）

「うおおおおおおあああああああッッ！！！！」

悲鳴にも近い、不可領域オーバーラインの絶叫と共に、その顔面に拳が突き刺さ
った。

——何やってんだよ、俺

#・2 リメイク(?) (後書き)

どうでしたでしょうか？

上条さんとの戦闘回です。

心理描写も加えながら書きました。
オーバーライン

不可領域は幼少の頃から暗部でその手を染めてきました。

そして、殺人を犯し、研究者たちを喜ばせる。それが不可領域の
オーバーライン

存在価値となり、存在意義となっています。

色々辛い出来事があった……という事を描けてたら幸いです。
では、次回。

(7/18 16:18 リメイク)

3 リメイク（前書き）

更新です。

大半リメイクかけました。彼女の口調変わってますw

#・3 リメイク

——深夜の路地裏。そこには怒号と絶叫と何かの液体の音が炸裂していた。

おそらく学生寮であろう——そこはコンクリートとコンクリートに阻まれた、細長い直線の様なところだった。

三十メートルほど先から明かりが見える事から、歩道である事が推測される。

そこで五人ぐらいの男たちが息を巻いていた。さらにその下へと視線を向ければさらに五人ほどの人間の腕、あるいは足が消えており、行き場を無くした血流から血が流れ出し倒れていた。

五人の男たちの手には、ジャックナイフを始め警棒や催涙スプレー、拳銃が握られている。その品々ひとつひとつが凶暴性を抱いており、使えば一般人など殺せる品物の数々。

男たちのそれは、使い慣れているように見える。すなわち、それが意味するのは、一般人程度なら瞬殺できる様なモノを使い慣れたベテランが持つ事でその凶器の持つ破壊力がさらにランクアップするということだ。

そんな五人の男たちは、たった一人の少年を取り囲んでいた。

彼らの目は血走り、殺意を宿している。平和ボケした人間がこの様な殺意を受けたら卒倒そっとうものである——それであるのに、その少年は動じない。

それが自然であるかの様に、まるで視界にすら入ってないかの様に、細く切り取られた夜空を見上げながら思案顔を浮かべているように見える。

コンビニに行った帰りであろう、右手には店名が入ったビニール袋をぶらぶらと提げている。中身はどうもペットボトル入りのミルクティーとコンビニ弁当などらしく十本以上のペットそれボトルと二個ほどのコンビニ弁当などがビニール袋を内側から押して存在感を出

している。

少年は、白く白く白い印象を持たせる容貌すがたをしており、それより彼のいる世界にとつたら学園都市準最強の超能力者（レベル5）というイメージを見る者へと凶悪に叩き付けるであろう。

——あの無能力者との一戦……どんな意味があったんだ。

一部しか名前を知られない不可領域と呼ばれる少年は、ぼんやりと思考した。

背後から絶叫がする。凶人の一人が、ナイフ片手に彼の背中へと突っ込んで行く。計り知れない殺傷力を含むナイフ——それでも、見向きもしない。

絶叫が聞こえてない様に、ぼんやりと思考しぼんやりと歩いていくだけ。その無防備で華奢きゃしゃにすら見える背中へと、凶人の体ごと全体重を掛けて突っ込む形でナイフが突き入れられ——ナイフを通り越して、男の両腕の手首が消滅した。

「あの後、携帯からデータも全部消えてるし……暗部から見捨てられたって訳かよ……クソツたれ」

何事もなく、後ろで先ほどの凶悪性を含む絶叫とは違う泣き叫ぶような絶叫を聞いても、自然体で独り言のように悪態をつく。

どうやら、一週間前のあの出来事以来少年は暗部にとって学園都市準最強ではなくなったらしく、その様な事を暗部の連中は本気で信じてしまう連中により今のような頭のイカれた者達に襲撃される様になったのだ。

先ほどの悲鳴に似た絶叫が絶叫を呼び、轟音が轟音を呼ぶ。音が路地裏で吼える。そして、行き場をなくした血流から鮮血があふれ出し辺りを鮮紅色へと変えてゆく。

——っかし……あれから俺は弱くなったのか？ 強くなったのか……？ 無能力者は強くなったのか、弱くなったのか？

ひたすら繰り返される自問自答。答えが出ない尽きぬ疑問を振り払うようにして、自分を取り囲む喧騒けんそうが沈黙した事にいまさらながら気づいた。

ようやく、路地に切り取られた夜空から背後を見やると、それぞ
れの体の各部位が消滅し、辺りに血を飛び散らせている光景が不可
領域の目に飛び込んできた。

これだけの惨状を目にしようが何であろうが、不可領域にとって
これは『戦闘』ではなく、夜な夜なコンビニに赴いて、ミルクティ
ーと弁当とかを買って帰る途中——という認識は変わらない。

そんな中、また違う路地裏らしき場所から女性特有の高い声の悲
鳴が不可領域の耳を劈いた。

とある科学の不可領域

あれから数分後——先ほどとは違う路地裏へとビニール袋片手
に入って行く不可領域の姿がそこにあった。

そこで気づいた。何で俺はここにいんだよ？ と。

悲鳴を聞いて、正義の味方かのように無意識的に体が動いた。それ
は、前までの彼を知っている人が聞いたらなんて言うであろうか。

「……違うよなあ。前までだったら、こんな悲鳴放つといて帰って
たハズなのに助けに行ってる何ぞ俺の人格じゃねえよ。何かが変わ
ったんだ……でも何が変わったんだ？ わっかんねえなあ……な
んなーんでーすかー？」

不可領域は首をひねる。今までとは違う感覚——変に体中がむ
ず痒く感じ、空いてある左手で背中をかきむしりながらレザー二
ーカーの踵で地面を叩く。

刹那、小規模の烈風が吹き、小さな閃光が爆ぜた。

一瞬で加速した不可領域は未だ疑問と格闘しながら、その紅の瞳
に少女を壁へと追い込み汚らしい笑みを浮かべる集団の男達を入
れた。

とりあえず、手短にいた一人の茶髪の長身不良の後頭部を左手で
掴んでからコンクリートの壁へと勢いよく叩きつける。

「げっ……ぶう」

血反吐を吐くが、コンクリートの壁へと顔が埋まったためじわじわと広がり顔面を紅に染め上げる。

轟音によって男達は気づき、轟音を上げた元凶を睨んだ。

そこには、白に近い灰色の髪を左手でかきむしりながら、燃え盛る炎の様な灼眼で男達を見ながら不愉快そうな表情を浮かべる少年がいた。

（——— ったく、何なんだよこのやる気のなさは）

うーん、と不可領域は腕を組み思考する。袋の中のミルクティーが揺れる。

前方には、少女を今から頂きますしよとする男達がいるというのに———そして、その少女を無意識だろうが助けに来たというのに腕を組み目を閉じて考える。

その様子に、男の一人からぶつんっ、という何かが千切れる音がして突然殴りかかってきた。

「あー………？」

余りにも気だるげに放たれた言葉。一瞬で肉薄してきたフードを被った男の右腕が風を唸らせて不可領域の顔面へ吸い込まれた。

突き刺さるのではない———文字通りに吸い込まれたのだ。

一気に不可領域の視界が鮮血で染まった。だが、拒絶するように顔面に降りかかってくる鮮血は消滅していくだけ。

「ぎゃああああああああああつ！！？」

突然無くなつた右腕。そしていきなり襲い掛かってくる痛みが男を驚愕と絶望が支配する。

「とりあえず、だ………邪魔だ三下」

拳を握り、左手を裏拳をするように振る。男の顔面にその白い肌の、黒いフィンガーレス手袋に包まれた拳がめり込む。

ベギィっ、という骨を粉碎する音を聞きながらそのまま勢いに任せて薙ぐ。めり込んだ拳からすっぽ抜け、まるでピッチャーから解き放たれた硬球のように空気を震わせ最初にコンクリートに顔面を突き刺した男と同じ末路を辿った。

そこまで行^{おこな}って初めて、ちゃんと悲鳴を上げた張本人の姿をまともに見た。

赤みがかった肩で切りそろえられた茶髪に、小ぶりだが筋の通った鼻。その下で桜色の唇が色を添えている線の細い、非常に整った顔立ちの少女。

不可領域^{オーバーライン}も言えたモノではないが、季節外れのベージュ色のブレザーの下に着た白い長袖のブラウス。首元にちよこんと赤いリボン^{ときわだい}を結んであり、紺系チェック柄のプリーツスカートという名門お嬢様学校、常盤台中学^{ときわだい}の冬服に身を包んでいる。どうも男達に強引にやられたんであるう、ブレザーを結びとめるボタンが千切れている。服装は置いとして、その顔立ちは不可領域^{オーバーライン}の知る顔だった。

『絶対能力進化（レベル6シフト）』と呼ばれる闇の者が知る非人道的実験の実験対象。常盤台中学に在学する学園都市第三位の超能力者^{イルガン}のクローン、御坂妹である。

違う場所と言え、やや大人びた感じの顔立ちになり胸元のブラウスのボタンが押し上げられ女性の象徴が主張している所。それと興味関心の無さげの瞳には光が宿っている場所である。

（オイオイ……何なんですかあ？ カミサマっつーのがいるなら俺にケンカ売つてるとしか思えねえなあ）

軽く自己嫌悪に陥る。

だが、一度踏み込んでしまった事だ——ここまでやっておいて中途半端で終わらせるのは癪^{しゃく}である。

とつとと終わらして家に帰りたい……そこから至った結論、

「三秒だ」

「ハア？ 何がだよ」

男の苛立ちを焦燥を含む声を耳にする。

男達の息を呑む音をBGMにしながら、やる気なく告げる。

「——三秒で終わらしてやるって言ってるんだボケ」

三秒後――、

不可領域は宣告通り、男達を始末した。

一秒目で中間子レーザーを放出し、一人以外全員を無力化。

二秒目で足元で光子を反射させ加速。

三秒目で御坂妹の近くにいた男の顔面を地面へと叩きつけ終了。

加速していた全ベクトルを男へとぶつけた為、一秒ほど空中に留まっていたが、ふわりと体重を感じさせずに着地する。

「えーっと、ミサカを助けてくれたって思ってもいいかな？」

「勝手に自己解釈しとけ……んじゃあな」

――もう用はねえだろ。

そう考えて踵を返して立ち去ろうと考えて、右腕を掴まれた感触がした。

彼の能力は『あらゆる物質を消失する』モノであり、『消失』はあくまで『消失』でしかあらず、明確な害意を持つ者にしか牙を剥かない。

それゆえ、最初から害意のない者だけは決して傷つけない。だが、能力者本人がそれを『害意』だと感じ取った時点で『消失』はするが。

この場合、これから何言われて黙って立ち去ろうと考えて為、掴みとめられるとは思っていなかったために呆然として**ぼっぜん**いる、と言ったほうが正しい。

「……ええっと、一つ言ってもいい？」

「……ご勝手に」

「ミサカはアナタを白馬の王子様と自己解釈しましたー」

「……、」

え、無言で立ち去ろうとしないで！？ お願いだって！？

オーバーライン

不可領域は余りにも不似合いな解釈をされたため、思考すらせずに立ち去ろう足を動かしていた。

だが、またなにやら懇願こんがんの叫びと共に右腕を掴まれ、不可抗力により後ろへとよろめく。

「……何なんだよ。早く用件言え」

サードシーズン

「ミサカは第三次製造計画の試作品で、ミサカネットワークから切り離されたから打ち止めからの命令は効かないのさつ。成長促進剤も違うから、能力レベルの強度も違うんだぜ？」

サードシーズン

なにやら第三次製造計画だの試作品だの、ミサカネットワークだのと誰も求めてないというのに勝手に説明を始めた。

用件の「よ」を構成する「y」の字すらも見当たらない説明をうんざりとした表情で右から左へ聞き流す。

クリアファースト

「コードもまんまで、『試作固体』で本来ミサカは実験に使われるハズなんだけど——」つて、その袋の中にある美味しそうな飲み物は何っ!？」

どうやら、感情表現のない御坂妹に対し、この御坂妹——否、

クリアファースト

試作固体はどうやら感情表現が豊からしい。

「いっぱいあるようだからミサカにもそれ分けてくれないかなー？」

「勝手にしろ……用件はそれだけだな、俺は行くぞ」

「はっあーいちよつと待って待ってよ待ってくださいよの三段活用！ かゝらゝの……ミサカは研究所行くつもりだったんだけど、

とりあえず遠いからアナタの家に泊めてもらいたいな」

オーバーライン

日付が変わって初めてのため息が不可領域の口から漏れた。

「……何で部屋がここまで綺麗なの!? ミサカの幻覚!? ねえ、これ幻覚!？」

「——不要なモンは捨てるんだよボケ。良かったなぐちゃぐちゃとかじゃ無くてよお? 脳天くるくるぱー」

「何か不名誉なあだ名がつ！？」

あれよこれよと言っている間にどうも自室に来たらしい。

不可領域オーバーラインという人間は、必要なモノはおいとき不要だと思ったモノは躊躇無く切り捨てる性質タチだ。

ゆえに、必要な家具とモノ以外何もないためそこら辺の女子などが思う、「男の人ってゴミとかいっぱいあつて踏む場所すらなさそうじゃない？」的な妄想とはかけ離れ小奇麗というよりこざっぱりしている。

意外と言えば意外だろうか、本棚には無数の教科書やら研究資料、バンク書庫の一部を記したモノなどが並べられている。

そこに思春期真っ盛りの女性の体に興味深々の男共が置いてあるような、いやらしい類のモノは一切ない。

「……アナタの弱点見つけようと思ってもアダルト系がない！？」

もはや女性の体に興味すらない、男性への異性的目線の始まりっ！
？」

「今すぐその愉快な単語の羅列が飛び出す口を閉じねえと、無理やり口ん中突っ込むぞ」

「えっ！？ ちょっと、そんないやらしい……むごごお！？」

とりあえず未だにぐだぐだ意味のわからない事を抜かす試作固体クリアワーストの口の中に、近くにあったタオルを突っ込んで黙らせるとビニール袋をガラス製のテーブルの上へと置いて三人ほどは座れそうなソファへと腰を掛ける。

そこへ、右手で口の中に突っ込まれたタオルを取った試作固体クリアワーストがまたしても、愉快な単語の羅列を並べ始める。

「ぺっぺっ！ 口の中にタオルの糸きれが……はっ！？ もしやこれが監禁された哀れな女性の感覚！？」

「ウゼエ」

「一言で終わらされたっ！？」

ムキィだのムキョオだの奇声を発する試作固体クリアワーストの言葉をことごとく粉碎しながら不可領域オーバーラインは袋の中からミルクティーを二本と買って

いた弁当二個をテーブルへと置くと立ち上がり、冷蔵庫へと向かっていく。

冷蔵庫の扉を開けると独特の冷気が流れ込んでくる。その冷気に心地よさを感じながら、袋の中身を冷蔵庫へと突っ込み扉を閉めた。台所の足元にある扉を空けて袋をその中へと突っ込むと、ソファへと歩いていき、もう一度座り込んだ。

「——えーっと、その飲み物とお弁当は？」

「……いらねえなら俺が食うぞ」

「ほしいほしいいったっきまーす」

棒読みにすら近い感じで不可領域を捲くし立てるように言つと、ミルクティー一つと弁当一つを取って食べ始めた。

「あつ、美味しい」

「こんなレトルト食品の詰め合わせがか？」

「それでもミサカは培養器に入ってたから、必要最低限の栄養は取ってたけどちゃんとしたご飯はこれが初めてなんだよねえ。だから、レトルト食品が何か知らないけど美味しいの」

「……………」

皮肉を浴びせたつもりが、先ほどとは打って変わり至極真面目な表情で言いながら屈託のない笑みを浮かべて、ありがとつ、と不可領域へと告げた。

いきなりのお礼に対し、黙り込みながら箸を動かす。

（調子狂う……だけど何年ぶりだっけかあ？　こんな邪気のねえ声を掛けられるのは……）

ぼんやりと、思う。

清潔感あふれる研究所の一室。

そこに、肩まである黒髪をオールバックにした、目の下に隈が目立つ男性——くりさき かいと 繰崎開登がいた。

砂糖も何も入っていない、純粹な苦味を追求したブラックコーヒーを口の中へと含み、目の前に広がる大きなモニターを見ながら、手馴れた手つきでキーボードを叩く。

「……第三次製造計画の試作固体は失敗、だな……」

呟きながら、試作固体のデータを打ち込んで行き一番右下に一つの文字を打ち込んだ。

『ミス
失敗作』

そう打ち込み終わると、イスの背もたれに体重を預け、右手を額に置き、数秒だけ目を閉じて深呼吸する。

「負の感情を取り込み安いように、奴のネットワークに細工をしたんだがな……最終信号のネットワークからは孤立させれたが何が失敗なのかな」

一人、黙々と考えながら繰返は呟く。

「……回収し、データを取って停止させるとするかな」

言葉を漏らし、ブラックコーヒーを飲み込み眠気を飛ばす。

そして、白衣を着なおすとドアを開けて外へと出て行った。

「こ、こんなにミサカのが、ミサカのがッ!!」

軽い錯乱状態に陥る試作固体。

場所はセブンスミストと呼ばれる第七学区にある有名なデパートだ。主に服を取り扱っており、昔のファッションから最新のファッション、全てを取り揃え、お子様から老人までの服を取り揃えた大規模な服屋という認識が強い。

男性の服もあるが、主に女性の服が大半である。と、言うのもファッションに敏感で、よく噂話などを行い、他人と情報交換などを行うのが女性で、女性から人気を取れば、口コミで評判が大きくな

る、それゆえに女性客を中心とした対策が施^{ほどこ}されているのだ。

錯乱する試作固体^{クリアワースト}を見て、ため息を吐^つく不可領域^{オーバーライン}。

暗部に属していた闇に染まりきっていた彼が、たった一人の女性に振り回され、それも女性服のコーナーの一角でため息を吐きながら両手で荷物を持っている。

荷物の中身は全部が全部女物の服などであり、内側から袋を押している。

あまりにもその光景がシニール過ぎて、彼を知る者がいたら思わず噴出すであらう。

昨日、弁当を食べた後いつの間にか寝てしまったらしく、朝起きてみれば不可領域^{オーバーライン}の寝顔を見てニヤニヤと笑う試作固体^{クリアワースト}が視界に入っただので、気恥ずかしくなりそれを隠すためにここまで赴いたわけだが——どうも裏目に出たようである。

九時頃に、セブンスミストに着き、現時刻は十二時を回ったところだ。

最初の三十分は、適当に不可領域^{オーバーライン}が男性服コーナーで少し見ただけで、残り二時間半は全て試作固体^{クリアワースト}に持ってかれたのだ。

「何時まで買うんだボケ、俺の財布を食い尽くす気か」

「むっ……… だけど強制入力^{インストール}された情報によると世間の女子は服選びに時間が掛かるって！」

「どんな情報だ。ウザッテ情報なんて消せ」

生憎、超能力者（レベル5）という事で、一ヶ月ごとに増え続ける莫大な奨学金と、今まで暗部で働いていた報酬、研究による金により、普通の超能力者（レベル5）よりも金が多い為、十万、二十万ぐらいどうって事はないのだが。

それでも、一日、しかも三時間で五万も削られてはさすがにキツイ。

大きな袋二つに無理やり詰め込んだ女性服。

なぜ、夜中に会ってまだ半日ほどしか経ってない女相手にこんなに気を使ったり金を使ったりしなくてはならないのか——自分が

嫌になり、己の灰色の髪をわしゃわしゃとかきむしりため息を吐いた。

その時だった。

『アクセサリーコーナーにて強盗が現れました。店員や警備員はお客様の安全を確保し——』

サイレンが鳴り響き、辺りが赤い光に照らされる。

戸惑う試作固体クリアワーストに荷物を無理やり持たせ、右手で頭を押し、首の骨を鳴らす。

ゴキツという骨の音を数回響かせ、オーバーライン不可領域は考える。

（厄介事ばかり舞い込んできやがる……胸糞悪い）

そんな事を考えながら、セブンスミストの階層情報呼び起こす。
（確か……アクセサリーコーナーは二階……強盗はそこで起きた。
つー事は、だ……もう降りてくるか）

ぼんやりと考えが浮かんだのと、強盗達が階段から降りてくるのはほぼ同時であった。

側頭部を右手で押して首の骨を鳴らし、強盗達へと歩いて行く。

そんな不可領域オーバーラインを心配するかの様に、

「お、不可領域？ 逃げる気はないの？」

「ああ？ 逃げるより倒した方が早えだろ」

「……殺しちゃったり？」

「周前で？ バツカじゃねえのか？ 手加減するに決まってるだろ」

——他の奴らと手加減の強さが違いけどなあ。

口の中で、呟く。

そして、強盗へと悠然と向かって行く。

歩いて行きながら、不可領域オーバーラインは自分の口元の変化に気づいていた。

強盗が、不可領域へと肉薄する。

「どけえ、クソガキい！！ 邪魔だゴラァ！！！」

拳銃を発砲し、不可領域へと弾丸を当てる。

そして強盗達は気づき、後悔した。

そこには、明らかな殺意を込めた、横に薄く薄く裂けた笑みを浮

かべながら弾丸を消す存在を見たからだ。

オーバーライン
不可領域が呟いた。それは、彼らにとって死の宣告。

「――裁きの時間だぜ、クソ野郎共」

数分後。

集団で押し寄せた強盗の軍団が地面に叩き伏せられ気絶している所を、警備員達に捕獲されていた。

全員が全員、その額に小さな痣ができていた。

オーバーライン
不可領域が行ったのは、なんとなく持ってきていたミルクティーを少量だけ空中へと撒き、それを音速に近い速さまで加速させ散弾の様にして当てたからだ。

それを三回行っただけで、強盗の軍団が倒された訳だ。

そんな中、オーバーライン
不可領域は試作固体を探していた。

荷物を地面に置いて、どこかへ忽然と消えた試作固体。

「あの野郎……どこへ消えた」

携帯端末など持っていないし、持っていたとしても聞く気にならないので連絡は取れない。トイレかと思い、数分近くにあったイスに座りながら待っていたが出てこない。

最上階までくまなく探したが、いない。

オーバーライン
不可領域は感じていた。

暗部で鍛えられた直感が告げている。

何かおかしい――。

とりあえず、もう一度だけ試作固体のいた場所へと戻り、近くにいた店員に事情を説明する。

「ああ、その人なら……確か、黒い髪のオールバックの白衣を着た男性がどこかへ連れて行ってましたよ？」

「——何だと？……判った。後悪いんだが……この荷物預かつ
といてくんねえか？」

「あ、はい……えーっと、お名前は……」

その問いに一瞬だけ迷う。

だが、オーバーライン不可領域は呟く。未だ覚えている自分の本当の名前を。

「——翡翠恭……んじゃ」

後ろで何か制止を促す言葉が聞こえてくるが知った事ではない。

まだ本名を覚えている自分に対して自嘲じちやうじみた笑みを浮かべるが、
すぐ思考はかき消される。

先ほどの店員の言葉——黒髪のオールバック、白衣の男。その
容姿は皮肉にも知っている男の容姿。

（黒髪のオールバック……白衣の男……オイオイ、繰崎くんじゃね
えかよお……）

元はと言えば、オーバーライン不可領域の能力を発現させ、その研究を担当し、
シスターズ妹達の研究に携わっていた加担者の一人、繰崎開登。

名前と顔を浮かべ、苦虫を潰した様な顔をした後、セブンスミス
トの出入り口の近くにあった黒の大型バイクへとまたがろうとする
男を跳ね除けまたがる。

「痛っ……なんだよアンタ!？」

「殺されたくなけりや黙って俺によこせ。安心しろ、ただ無料で乗るつ
もりはねえ——有り金全部渡してやる」

そついいながら財布から念のためにおろしてきていた残りの十五
万を男の顔面へと叩きつけるとエンジンを唸らせた。

第八学区にある一つの研究所。

電気は通つてはいるが、誰も使わなくなつた研究所だ。
オーバーライン

不可領域は、数年ぶりに訪れた研究所の廊下を走り、一つの扉の
手前で止まる。

中から聞こえるキーボードを打つ音。それを聞いて、まだいるよ
うだな、と呟いてから扉を開けた。

目の前に広がるのは、研究所、というよりは計算室といった感じ
の内装だった。四方の壁を埋める業務用冷蔵庫のような量子コンピ
ュータ——なんていつているが、どう考えても型遅れの実験品を
流用しているようにしか見えない。だが、四方を埋める量子コンピ
ュータはどれも起動しておらず光はない。

ただ中心にある一台のスーパーコンピューターを中心に、山積み
された書類の数々と大量のデータ用紙は床が見えなくなるほど機械
から吐き出され、冷却用ファンの音が重く低く室内を満たし、その
全てを、この窓一つもない部屋の中を無数のモニタが不気味に照ら
し出している。その中で一つだけある席に座り込み、コーヒーを飲
む栗色の長髪の女性がポツンと佇んでいる。

研究などが行われていた当時は、この狭苦しい換気扇も何もない
部屋の中に二十人以上の研究員がさながら鮎詰めの様になり働いて
いたわけだが、現在では見る影すらない。

その女性の容貌は、寝間着の様な、黒のジャージの上から羽織つ
た白衣。まつげの長い、線の細い整った容姿の女性。^{オバライン}大人の雰囲気
を持つ、誰がどうみても美人だと言うその女性は、不可領域の知り
合いの一人——瀬谷朱色。^{せだにあけいろ}

「何の用——あら？ 久しぶりね、不可領域？」^{オバライン}

「そんな悠長にしてらんねえんだ、こっちはな。——頼みてえ事
がある、瀬谷」

肩をすくめて、不可領域の言葉に笑う瀬谷を無表情に見ながら本
題を単刀直入に言う。

「時間がねえ、繰崎についての情報を提供しろ。後は、第三次製造
計画の試作固体の居場所も提示しろ」^{スクリアウスト}

「……驚いたわね。貴方が、あの繰崎の居場所について聞いてくる
なんて。それに第三次製造計画についても知ってるなんて……」^{サードシズン}

驚きを隠せないのか、おどけた表情で不可領域を見るも、その不
^{オバライン}

可領域の真剣さに、すぐ真面目な表情へと変えた。

「暗部から解任されたっていうのに、凄い情報収集力なこと」

「黙ってやれ。言っただろ、時間がねえって」

「ハイハイ……あなた 繰崎は、不可領域の研究から外されて、シスターズ 妹達の研究を担い始めたのは知ってるわね？」

「ああ」

無表情のまま、続きを聞かせる、と促す。

「その後、彼は『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の加担者になってるわ。それから、サードシーズ 第三次製造計画の研究の中心人物にもなってるわ」

「……………」

「で、彼が考えたのは、個々体のネットワークに細工をして、負の感情を取り込み安いようにした訳」

「ああ？ 負の感情だあ？」

「そうよ——、そう続けながらコーヒーを一度口に含み、喉を潤し、パソコンのキーボードを叩き説明していく。」

「負の感情を取り込み安いようにする事で、攻撃性を持たせるんだけど……その様子じゃ、貴方が言う試作固体は失敗してるようね」

そして、ハッキングに成功したようで、瀬谷は、見つけた、と小さく呟く。

それを聞いて、瀬谷の近くへと寄り画面を覗く。のぞ

『サードシーズ 第三次製造計画。最初に作り上げた、試作固体。ミサカネットワークの影響を受けない事に成功、同時に負の感情を取り込み安いように細工を仕掛けた——』

「そんなどうでもいい事はいいんだよ……スクロールしろ」

画面を睨む不可領域に苦笑しながら、無言で下へとスクロールしてゆく。

そこで、オーバーライン 不可領域の目に止まった一文が最後の行にあった。

『——試作固体に施した、負の感情を取り入れやすくしたハズの細工は失敗。結果、試作固体は失敗作となった』

その一文の後、行間を空け——『失敗作』と文字が書かれていた。

「……失敗作を犯したんであったら、そのデータだけ取って繰崎の事だから処分するでしょうね」

（——あの野郎が繰崎に殺される？ ふざけんなよ……俺や繰崎がどんだけ腐った人間だろうが、勝手な実験の元で決められた末路を辿らされていい訳がねえだろうが）

それは、自分が何人も人を殺したからといって、繰崎がどれだけの人を犠牲にしたからと言おうが、純粹無垢な試作固体が第三次製造計画だなんていう研究者の勝手な実験のもとで作られ、その上失敗作と断定され処分されていいハズがない。

それを聞いた時、既に不可領域は決意を出していた。

——繰崎のクソ野郎をぶち殺して、試作固体を助け出す。

それが、彼が弾き出した答え。

「——気に食わないわね。失敗したからと言って、殺される道理はないのに……この問題は上の人たちも関わってくるでしょうね」

「そうだろうなあ……ハッ、俺を解任にしゃがって上の連中に手柄取られんのは癪だ。潰してやるよ……」

「協力するわ……大方、場所は——この研究所よ」

キーボードを打ち鳴らし、瀬谷は一つの赤いマークがついた研究所を指差す。

この研究所から、バイクを全力で走らせて三十分程度の位置。

「根拠は何だ」

「前に、情報とか集める為にここをハッキングしたのよ。そして、見つけたのがさっきの資料」

「……そうか、おい。俺の携帯にその場所を送信しろ」
僅かに、焦燥感を表情に浮かべる不可領域の携帯へすぐに地図を送信する瀬谷を見て、扉へと向かう。

「……気を付けてね、研究所中に、能力者が持つAIMを無効化する設備『AIMジャマー』が張り巡らされてるようだから……とり

あえず、ハッキングして、設備を切るからそれまで粘ってちょうだい」

「オーバーライン 不可領域を気遣うその言葉を聞き、扉を開ければその焦りがにじみ出る背中へと声が掛かった。

「はい、能力が使えないからこれしか頼れるモノなんかないわよ」
放り投げられた拳銃を受け止め、ポケットへと入れる。次に投げられたのが、弾丸が入ったマガジン。

どうやら、予備の様だ。それを受け取り、違うポケットへとそれを突っ込むと、瀬谷からもう一度声が掛かった。

「……気を付けて」

「ハッ……俺の心配してねえで、さっさとハッキングに取り掛かりやがれ。俺を誰だと思ってんだよ……天下の超能力者（レベル5）、オーバーライン 不可領域だぞ」

それだけ瀬谷へと告げると、足早に扉を閉めて、オーバーライン 不可領域はバイクの元へと走って行った。

#・3 リメイク（後書き）

読了ありがとうございます。

なんとも長つたらしい……まあ、書いてたらこうなるんですがね。
見たとおり、試作固体は打ち止めの位置。クリアワースト 繰崎くりさきは天井の位置。瀬せ

だに谷は芳川の位置です。

今回は、オーバーライン不可領域が能力応用しています。

持っていたミルクティーの液体をばら撒き、落ちようとする運動を停止させ、前方へと加速させました。

音速に近い速度で、飛ばしてますから摩擦で蒸発はするでしょうが、しないギリギリの位置だったので、蒸発はしていない。と、いう事になります。

ひやつふい、本名ばれたねばれたよばれましたよ。

（6 / 1 8 2 2 : 5 6 リメイク）

#・4 リメイク(?) (前書き)

更新更新
♪

誤字などを修正。

#・4 リメイク(?)

瀬谷^{せだに}のいる研究所を出て三十分ちよつと経った。
オーバーライン

不可領域は漆黒の大型バイクにまたがり、正面一杯に広がる研究所を見据え、拳銃を取り出す。

電子制御されたセキュリティの核となる場所へと弾丸を撃ち込み、機動を停止させる。

鋼鉄の自動ドア。無論、暗号を知らなければ開かない最新鋭のモノを使っている。

(……強行突破しかねえか)

一度、反転し距離を開ける。五十メートル程離れた所で、研究所に向かわせるようにバイクを位置する。

一氣にエンジンを蒸かし、やや体を屈める様にして体勢を作り――車輪が急速に回転した。

ギュギャツ！ その場で一氣に回転したため、タイヤと地面が摩擦を起こし、その場に黒い線を作り上げる。

一氣に十メートルを突破する。それでも勢いをとめず、さらに加速させていく。目前となった、自動ドア。

狙うは――バイクに乗ったまま、ぶち壊す事だけ。

ガゴオオンツ！！ 空気を振動させ、ドアが破られた。破片が散るが、氣に留めない。

一氣に走らせ、目的の部屋まで走らせる。

思ってた以上に広い廊下、バイクを走らせるには好都合だ。そのまま、ひとつのドアが目にと留まった。

風を切り、エンジン音が響く中、キーボードを叩く微かな音が聞こえた。

入り口を破壊したように、突破するのみ――やや、斜めに車体をずらしドアを破壊した。

「ヒヤハハハッ！！ 来てやったぜ、くりざき 繰崎クウウンッッ！！

！」
「——オーバーライン 不可領域！？」

扉を破壊し、バイクを横滑りさせ急停止する。

目の前の、黒髪をオールバックにした長身の、目の下に隈くまを作った男——くりざき 繰崎開登かいとを見て、一気に口角が付きあがった。

入り口から、一メートル付近。そこから、繰崎を見ながら捕まった少女を探す。

部屋の構造は、扉を入れて目の前に、巨大なスクリーンが広がり、その両サイドには展望する所がある。展望先は、下に繋がっている実験所。

部屋から右端と左端に、階段があり、そこから下りると、展望できる実験所が広がっており、六つの病院などにある様なベッドが用意されており、ちょうど頭部分の上にベッドを覆う様な透明なカプセルの様なモノがついてある。

そこに、被験者を寝かせ、無数のコードをつなげたヘッドギアをかぶせ、カプセルで覆う。そして、後はヘッドギアへとパソコンなどをを用いデータを入力する事で、脳開発を行ったりする事が出来るのである。

そして、そのベッドの一角にベージュのブレザーにブラウス、紺系チェックの膝丈プリーツスカートという服装から、浴衣の様な純白の手術衣の様なモノを着させられた赤み掛かった茶髪、整った容姿をしたやや大人びた容姿をした、第三次製造計画の初期に作られた——クリアファースト 試作固体がそこに寝ていた。

「な、ぜ……オーバーライン 不可領域コイツがあるんだよな？ —— そうか、そうか…… 判ったんだよな。試作固体だな？」

そう言いながら一気に、キーボードを叩く。

繰崎の正面に広がるスクリーン一杯に文字が現れた。

『データ送信完了——これより試作固体クリアファーストの処理を始めます』

とある科学の不可領域^{オーバーライン}

「ハハハツ！！ 後、十分後に全ての準備が終わるんだよなあ。つまり、試作固体^{クリアウースト}の付けているヘッドギアから脳細胞を破壊するマイクロウェーブ波が出るんだよなあ」

「――殺す」

「無駄だな。この研究所一帯に對能力者用に施した『AIMジャマ』が、お前の能力を止めているんだよな。つまり――」

繰崎の言葉を掻き消す様に、ダンツ！ という、シンプルな音が響いた。

次に聞こえるのは、繰崎の絶叫。慌てた様に、痛む右足の太ももへと視線をやれば、そこに小指ほどの大きさの赤黒い風穴が開いていた。

不可領域^{オーバーライン}は瞬時に取り出した拳銃の引き金を続けざまに三発打つ。一発、右足の太ももを押さえる左手の甲を貫き、さらに太ももへと弾丸を残す。

二発、左足の太ももへと赤黒い液体を吐き出す風穴を作り上げる。三発、残った右手を手のひらからの確に貫く。

「あ、ぎゃあああああッ！！？」

「オイオイ……頭のネジ緩んでんじゃねえのか繰崎クンよお？ 何の考えもなしで侵入したとでも思ってたのかよ？」

「が、つうぐ……ああああ」

四つの風穴から、それぞれ血に汚れた男から吐き出される、やや粘着する赤黒い液体が絶え間なく零れ落ちる。

白衣をすぐに赤へと塗り替える。

込めていた弾がなくなつたため、カチツカチツという軽い音が響く。それを聞いて、舌を打ちながら瀬谷に貰った弾丸を込めてあるマガジンを挿入する。

既に無力化された繰崎はその場に倒れ伏せ、痛み^{うめ}に呻^{もた}き悶える。すぐに目の前のキーボードへと向かい、慎重に叩いていく。

そして、スクリーンに言葉が並んだ。

『マイクロウェーブ波の注入を停止しますか？』

その下に、YESとNOの文字が並ぶ。それを見て、不可領域^{オーバーライン}は迷わずYESを選択して押す。

『マイクロウェーブ波の注入を停止します。カプセルが外れます—』

その文字列を無視し、左側の窓ガラスへと移り下を覗くと、プシユウウつという、空気の抜ける様な音を鳴らしながらカプセルが外れる光景^{オーバーライン}が不可領域の目に映った。

（とりあえず助ける事は出来た——繰崎の野郎をぶち殺して、試^ク作^{リアファースト}固体引き連れてさっさと帰るか）

そう考えながら、拳銃の撃鉄を叩き、引き金へと指を伸ばし、痛み^{うめ}に呻^{もた}いている繰崎へと近づきその眉間に、銃口を押し付ける。

「ひっ！ うっ、ぐ……た、すけて……！！？」

「——残念だな、俺は善人じゃねえ」

そのまま、引き金を引くと、後ろへと力なく体を放る繰崎の最後を見た後に不可領域^{オーバーライン}は階段を下りようする。

そこで、不可領域^{オーバーライン}の耳に廊下を走ってくる音が聞こえた。

（誰だ……？ まだ『AIMジャマー』は解けてねえつつう事はアイツじゃねえ……と、すれば——上層部の奴かつ！）

そこまで考えて、近くにあるビジネスデスクの裏へと潜りこみ、扉から見て、死角となる場所から少しだけ顔を覗かせる。

だんだんと足音が近くなる、一人だけの様だ——だが油断は出来ない。出来るハズもない。

上層部の奴らだとするなら、確実に腕がいい、絶対に任務を遂行^オさせる奴を派遣するハズ——つまり、まだ能力が使用出来ない不可領域^{オーバーライン}には不利な状況だ。

いくら不可領域^{オーバーライン}が、拳銃などの銃器の使用法を教えられてもそこ

までだ。

そのとき、扉の向こうに顔が見えた。

不可領域は一瞬も戸惑う事なく引き金を引く。

乾いた音とともに、弾丸が放たれた。

「——ッ!?」

気づかれた様だ。避けたらしく、壁に当たる音が耳に響く。

すぐさま、身を屈めて近くビジネスデスクへと身を潜めた襲撃者。

上層部直属の、暗殺者——かませ けんじ鎌瀬犬示。

ターゲット

射撃の腕は一流で、狙われた標的は確実に仕留めるヒットマン。

それに対し、拳銃の扱いをただ叩きこまれ、一般人以上には使えるが能力に頼っていた不可領域に勝ち目はまずない。

要するに、繰り広げられるのは頭脳戦もしくは鎌瀬の独壇場のみ。

「……ッ」

汗が流れる。不可領域は内心で舌を打つ。

突如、照明が消えた。ほんの少し、前が見えるぐらいの視野。

不可領域の表情に焦りが現れた。

（チィ……こっちは、残り六発しか残ってねえつつうのに……どうすりゃ勝ち目がある?!）

近くに弾丸が都合よく転がっているハズがない。

いきなり、能力が回復する訳でもない。

相手がいきなり、退いて行く訳でもない——そんな事はただの幻想でしかない。

（考えろ……残り六発で仕留められる方法を）

背中から冷や汗が伝う。左手で額に浮かぶ汗を拭い、少し前かがみになり顔を出し相手の様子を見る。

暗闇の中、ひとつも前が見えず更に焦燥感が増した。

鎌瀬が動きを見せた。

ガァンガァンッ！ という立て続けに響く銃声。

音からして、大口径のマグナムか何かだろう。

（バレたか！？）

考えながら顔を隠す。

顔を出していた場所に的確に弾丸が飛び込み、木製のビジネスデスクの一部を食らう。

「——！」

喉が干上がった。

口をこじ開けられ、その中にマツチが何かを突っ込まれたような、一気に水分が消えて行く様な感覚がした。

（……クソつたれ！ この暗闇の中で、何で俺の姿を目視出来る！）
必死に、目視できる方法を浮かべる。

そこで一つ頭に浮かんだのが——生体反応、それも人間サイズの物体を物体間を通して見る事が出来る透視能力クレアボーイアランスの能力を科学的に発現させ、ゴーグルに装置をつけた透視スコープ。

最初、顔を見た時に目の部分にゴーグルを装着していた。それに加え、透視スコープだと判る様に両側面に三本の赤いラインが入っているのが特徴。

それがついていた——つまり、鎌瀬は透視スコープを付けている事は確実。

（こつちがバレてる理由は判った……考えろ、時間はねえ。こつちは透視出来るモン何て持ってねえんだ……近づかれたゲームオーバーだと思え！）

自分に必死に言い聞かせながら、ビジネスデスクの中心へと移動するようにして、背中を預け——耳を弾丸が掠った。

ベギッ！ という、ビジネスデスクを構築する木材が破壊される音。

オーバーライン
不可領域の弾丸の威力は、このビジネスデスクを大きく見積もっても陥没させるぐらいの威力しかない。

だが鎌瀬の弾丸は一発でこの分厚いビジネスデスクの素材を食らう威力を持っている。

明らかに不利な状況。それは、幼稚な子供でもバカなサルでもわ

かる明確な現状。

（クソ野郎……一撃で俺を殺そうと思えば出来るつつうのにこの状況で遊んでやがる……っ！）

一気に背中全体から冷や汗が流れ出た。

二回、深呼吸を行い一から、室内の状況を思い浮かべ——勝利の算段が付いた。

（……ハハッ、考えてみりゃあ楽勝じゃねえか……透視スコープの弱点もあるんだ——覚悟しろ、クソ野郎……これでチェックメイトだ）

算段が付いてからの不可領域^{オーバーライン}の行動は早かった。

拳銃をポケットへと突っ込み、ビジネスデスクから飛び出したのだ。

（バカがつ！これで終わりだ！！）

鎌瀬はそう思っていた。こちらからの攻撃は完璧に正体すらわからない奴へと叩きこまれる。絶対的勝利は、もはや鎌瀬のモノ。

余裕すら感じさせる思考をぶつけるように、引き金を続けて引き、計三発を打ち込む。

透視スコープが、相手の生体反応を見て視覚情報として網膜に焼き付けるため、暗闇でも相手を殺す事が出来る。

ダンダンガンッ！音と同時に、相手の体へと突き刺さった音がした。

明らかに弾丸が打ち込まれ、後数秒で即死ルート。そう思い、透視スコープを外し真っ直ぐと歩いて行く。

それが運命の尽きだった。

「詰めが甘いんだよボケ」

「ッ！！？」

死んだと思っていた、不可領域^{オーバーライン}の声が響き、同時に、銃声が鳴り響いた。

「ごっ、があっ！！？」

その弾丸は、真っ直ぐと鎌瀬の胸へと吸い込まれるようにして貫

いた。

血を吐き散らし、その場に沈み込む見捨。

ここに來て不可領域オーバーラインに軍配があがった。

「……チツ、手間取らせやがって」

悪態を付きながら、拳銃をポケットに突っ込み照明を付けた。

カチツという音と同時に、照明が付いた。

「ったく……透視スコープが生体反応を持つ野郎しか認識出来ず、物体間を透視出来るっつーのが決め手だったな」

いまだ額から吹き出る冷や汗を拭い、そうつぶやく。

不可領域オーバーラインが取った作戦はこうだ。

透視スコープというのは、物体間を通し生体反応……を映し出す暗闇専用の暗殺道具。

そして、この部屋には生体反応の消えた繰崎開登……という死体がある。

不可領域オーバーラインはこの二つを使って作戦を決行した。生体反応の消えた繰崎は透視スコープにとって物体にしかならず、映し出されないモノとして認識される。

そこへ、生体反応のある不可領域オーバーラインが重なる事で、一つの生命反応として映し出される。

その生体反応へと弾丸を撃ち込まれる。だが、物体を映し出さない透視スコープには不可領域せいたいはんのうへと当たったと認識が成される。

鎌瀬には、生体反応へと当たったと情報が伝わり、安著し透視スコープを取り、死体を確認しようと近づき撃たれた――。

透視スコープという一つの道具が手がかりとなってやっと織り成す作戦である。

その上、暗闇の中、相手から丸見えという死と隣り合わせの状況で冷静に判断出来るか出来ないか――そして、見極めれるか見極められないか、が勝利をつかむ手がかりとなる。

一般人なら、緊張感につぶされてあっけなく死ぬであろうが、不可領域オーバーラインは生憎、暗部で死と隣り合わせの状況下で戦ってきた事が何

回もある為此の判断が出せたと言っても過言ではない。

「……クリアワースト
試作固体だな……」

「……オーバーライン
不可領域はそうつぶやき、階段を下りようとして無数の足音を耳にした。」

（まだ残ってやがったか！？）

身構え、右手が拳銃のグリップを握り締める。

扉へと顔を現したのは——黒い寝間着の様なジャージの上に羽織った白衣。腰まで伸ばした栗色の髪。まつげが長く、ぱっちりとした大きな瞳に線の細い整った容姿を持つ、大人びた雰囲気を持つ女性——瀬谷朱色がそこにいた。

「……瀬谷じゃねえか」

「悪かったわね……外にいた他の人たちは、私達で倒しといったわ。
クリアワースト
例の試作固体は？」

「そこだ……ああ、後でいいからセブンスミストに行つて来んねえか？ 試作固体に言われて買わされた荷物預けてんだ……本名使つてつから、言えば大丈夫だろうよ」

「ハア……仕方ないわね……と、いうより本名使つなんてね？ また珍しいわね」

「……オーバーライン
不可領域は後ろから投げかけられる声を、ウゼエの一言で終わらせると、試作固体の元へ行こうと階段へと足を踏み入れる。」

瀬谷の背後にいる者達は暗部関係の救急隊員や、瀬谷の知るボディーガードを呼び集めた人々が待機し、救急隊員は繰崎へと近づき慣れた手つきで担架へと乗せて行く。

瀬谷はというと、鎌瀬に目をやって——そして気づいた。まだ、息の根が完全に止まっていけない事を。

そして、銃口を不可領域へと向けている事を。

先ほど『AIMジャマー』の機器を止めた為、後数秒で研究所全体に掛かっている『AIMジャマー』は消えるだろう——だが、それ待っただけ鎌瀬という暗殺者は甘くない。

「……オーバーライン
不可領域ツ！！」

「何だよ……まだ、生きてやがったか!？」

オバーライン
不可領域もすぐに、拳銃を引き抜き放つ。

ダガアンツ!! 二人の銃口が火を噴いた。

それは交わる事なく、すれ違いお互いの眉間に吸い込まれ――

「ごふっ……」

鎌瀬の口から血が溢れ、全身の力が無くなり、膝から崩れ落ち、すぐに体全身を強張らせ事切れた。

オバーライン
一方の不可領域の額に吸い込まれた弾丸は、そのまま寸分の狂いなく眉間を貫く。

らせん
螺旋を描く弾丸が引き起こす衝撃波がその灰色の髪を数本散らし、

「が……はぁ……っ」

膝から崩れ落ちる。階段を転がる様にして滑り落ちて行く。

オバーライン
「不可領域ツ!!」

瀬谷の悲鳴がむなしく室内に響いたのだった。

#・4 リメイク(?) (後書き)

読了ありがとうございます。

四話目にして、PVが既に1000を超えた事に驚きを隠せません……ッ！

お気に入りも5！ 評価は30！ 前にも書きましたが、大体70pt超えたらいいかな？ と思ってるんですが……越せるでしょうか？

それはさておき、今回、オーバーライン不可領域が顔面撃たれました(・ω・)ベタベタな弱体化展開ですね！。

くりざき繰崎さん、実は木原ボジにしようかと思ってたんだぜ——？

それがこの様さ、ハハッ……ただのおとり罠になる始末だぜ？ 下がる所まで下がったな繰崎くん。

せだに瀬谷さんエ……芳川さん過ぎるじゃないか。

何て思いながら、次回で一章を終わらせる気でおります。

さて、次回お楽しみにしてください。

透視スコープはオリジナルです。

(7/19 10:06 リメイク)

#・5 ありがとう（前書き）

「……柄にもなく照れるのね」
オーバーライン
不可領域の知人——瀬谷朱色
せだにあけいろ

「……ウゼエ」

学園都市準最強の超能力者（レベル5）——
オーバーライン
不可領域

「題名と前書きが変わってる!？」
ミス
第三次製造計画の失敗作——
クリアワースト
試作固体

#・5　ありがとう

「……オーバーライン不可領域……」

その声で、灰色の髪の少年、オーバーライン不可領域——本名、ひすいきょう翡翠恭——は目を覚ました。

今が何時だかわからない、場所も分らない。とりあえず、上半身を起こしてあたりを見渡すと表現的に全面真っ白で、ここまで行くせいけつと清潔感というよりは真っ白すぎて少年にとって不快ささえも感じさせる。

ちようど左側に窓が並び、この空間にはオーバーライン不可領域の佇たたずむベッドしかないようである。右を見ると円形のガラス張りのテーブルの上に果物食べられた残骸ざんがいがあり、その隣にある棚の上に、お菓子が入っていたであろうバスケットの蓋ふたが開かれ何も無い空間が見える。

そして、ちようど右手の手元を見ると、両腕をベッドの上においてその両腕の間に顔を横にして眠る赤みの強い茶髪の少女が子供のような寝顔を浮かべ眠っていた。

声の主であつて、オーバーライン不可領域が今回死に近い状態までなつて助けた少女、サードシズン第三次製造計画の失敗作、クリアワースト試作固体その人である。

（……状況の整理は出来た。だが、何で俺は病室なんかにいるんだよ……くりざきあん時確か俺は——）

くりざき繰崎開登のいた研究所で、上層部から派遣された暗殺者と射ち合い眉間へと弾丸が刺さつたハズなのだ。

なのに、今こうして状況を把握できるし、思考も出来る。

（——撃たれたハズなんだけどな……）

そこまで考えて、クリアワースト試作固体よりさらに奥にあるスライド型の扉が開かれた。

そこには、白衣に身を包む力エルにも似た顔の中年男性が立っており、その顔には、起きたんだ、という様な表情を浮かべオーバーライン不可領域

へと近づいてくる。

「気分はどうだい？」

「……快調だ——って言いたい所だが聞きてえ事があんだが」
「なんだい？」

それは先ほどから気づいており、疑問に思っていた事。

右手で自分の首についてある黒いチョーカーをトントツと叩き、

「チョーカーは何だ？ それに俺は何で死んでねえ？」

「ふむ、まずは後者の疑問から言わなきゃダメみたいだね」

もったいぶる様に、呼吸を整えるように、一拍だけ置くとカエル顔の医者は少年の問いに答えた。

とある科学の不可領域^{オーバーライン}

つまり、こういう事だった。

上層部より派遣された暗殺者の弾丸は眉間に当たり、頭蓋骨に当たったが、その直前に『AIMジャマー』が全室内から消え、デフォに設定されてある『消失』が蘇り^{よみがえ}少しあたった時に消失した。だが、亀裂^{きれつ}の入った頭蓋骨の破片は前頭葉を傷つけ、言語機能と計算能力が失われた。

そこをカエル顔の医者の下へと運ばれ、電極を内臓したチョーカIを付ける事により前頭葉の言語機能と計算能力を復活させる事が出来た。

理屈としては、一万ものクローン体を使った並列演算ネットワーク^{ラストオーダー}のある打ち止めと、その下位固体の妹達の脳^{シスターズ}をリンクさせ、言語機能と計算能力という欠損機能の代用を行う事で欠損機能の修復。

そのネットワークは同じ脳波の波長を持つ者だけで作られている。波長の違う不可領域^{オーバーライン}が無理やりログインすれば波長の合わない不可領域^{オーバーライン}の脳が焼ききられてしまう——が、双方の波長を合わせる変換器を用意する事によってその危険性はなくなる。

その変換器のデザインが不可領域^{オーバーライン}の首元に付けられてある内側に

電極をつけたチョーカーという訳である。

「——理屈は判った。しかしこんなに早く作業が終わるモンなのか？」

「実際ならあり得ないね。だけど、キミの前にキミと同じ状況の——そう、白髪の少年がいてね。その時も同じ状況で、チョーカーを作っていたから手術の作業も、チョーカーを作る作業も実際より短くなったのさ」

（白髪の少年……ハッ、あのクソ野郎かよ……）

心当たりがあり、自分を変えた一戦の前まではどこかで尊敬すらしていた白髪の少年。

皮肉だな、と思った。

同じ実験で同じ無能力者に叩きつぶされて、その上、同じ様に脳にダメージを負って、同じチョーカーを付けているのだから——

オーバーライン

それは不可領域にとつて皮肉でしかない。

それでも……と、スヤスヤと眠る少女を一瞥いちべつした後、数秒だけ目を閉じて、その紅の瞳で医者をまっすぐに見据えた。

「……礼を言う、助かった」

「礼を言われるまでもないね。僕は医者だよ？」

そう続けながら、踵きびすを返し、扉の取つてを掴むと不可領域へと向き直る。

「——患者に必要なモノを揃えるのが、僕達医者の役目だからね」
「……ハッ、そうかよ」

医者の言葉を聴いて、誰となしに鼻で笑うと不可領域は一瞬だけ——本当に一瞬だけ、今までではなかったような優しさの籠こもった笑みを浮かべ試作固体の頭を少しだけ撫でると、ベッドの上に寝転がり、眠りについた。

その時、何かを呟いたが誰も知る由もなかった。

「——起きてゝ、起きてゝ！ 起きないとミサカが暴れちゃうぜえええ！！」

騒音。

限りなくうるさい声がした。耳の鼓膜こまくをいとも容易く突き抜けたと思うと、脳へと直結するような騒音だ。

その声に目覚めた不可領域は、上半身を起こしざまに右手で試作クリアワイストの頭部へと手刀チョップを落とす。

「痛いったゝゝゝい！？ 何で何でよ何でなのお！？ ミサカはアナタの心配してただけなのに！」

「心配だっと思うなら静かに出来ねえのかクソガキー！！」
口論を繰り広げながら、枕元に置かれてあつた携帯を左手で掴み上へスライドさせて時間を見る。

時間は午後四時十八分——医者と話して眠りについたのが確か、午前七時ほどだった。

睡眠時間は九時間ほど。十分過ぎた——その上、何日寝ていたのであろうか。

「……とりあえず聞くが、俺は何日寝てた？」

「ミサカの言うこと少しは聞け——って……それなら二日かな」

「二日……四十八時間プラス九時間……」

ざっと、五十七時間。十分、いやもうすでに十分の域を超越ちょうえつすらしている睡眠時間。

計算してから、大きくため息を吐き出した。

そして気づく。なにやら試作固体の右手に大きな紙袋が握られている事に。

「……何だよ、その袋」

「あつ、やっと気づいてくれたゝ、わーい。えーつとね、アナタの前の服は血が落ちなくなつてあれで、動き回るのもなんでしょ？

だから、瀬谷せたにと服を買いに行つてきたんだあ！」

にこやかに、屈託のない笑みを浮かべる試作固体。

血が落ちない、などと言っている辺り不可領域が一体誰の為に何

を行^{おこな}ったかぐらい聞いているのだろう。

その事を考えていると、その様子を見て気づいたのであるうか——
クリアワースト試作固体の表情が目に見えて落ち込んでいった。

「……ゴメンね」

「あ？ 何がだよ」

「——ミサカの為に、命を懸けて助けてくれたんだよね……」
「——、」

想像も予想もすべて出来ていた。

だけど、それを実際目の前でされると戸惑^{とまど}ってしまう。その為、
一瞬だけ呼吸が止まった。

オーバーライン黙る不可領域を見ずに、白いシートを見ながら試作個体は続ける。
「……嬉しかったよ。ミサカを助けてくれたって瀬谷に聞いた時……
嬉しかったし、アナタが危険に遭^あったって聞いて悲しかったんだよ……？」

その瞳から、透明な液体が零^{こぼ}れ落ちた。
オーバーラインそれを見て、不可領域は啞^{おげん}然とした。

確かに、命を助けた。それは自分のためだったのかも判らない——
——謝罪されると思ってたし、もしかしたら礼も言われるかな、とも思っ^{おも}てはいた。

だが、誰が「悲しかった」という言葉を予想したであろうか？
そして誰が涙を落とすと思っ^{おも}ていたであろうか？

驚愕^{きょうがく}と、今までになかった自分でも分らない感情がこみ上げてくる。

それが何かは判らない。でも、ひとつだけ判る事があった。

（コイツがアイツの言っ^いっていた『大切な奴』って事かよ………似合^{にあ}わねえな、前までの俺の人格^{ソフ}じゃねえし………それに——）

それに、もうひとつだけ——

（——コイツだけは、コイツの周りの人間を悲しませたくねえっ
て思っ^{おも}ちまうなんてな………）
それが芽生えた感情だった。

今まで彼を知っている者がいたら、笑うかも知れない。ほんの握りの連中は喜んでくれるかもしれない。

どちらにしろ、彼は思う。

（柄じゃねえな……）

いまだ、黙ったまま声を押し殺しているのかやや口元を強張らせながら涙を落とす少女を見て、舌を打った。

「俺は自分のしたい事をしたただけだ。そこにたまたまお前がいただけだ……勘違いすんじゃないよボケ」

それは、ぎこちない言葉だったし、そっぽを向いていたし、^{クリア}試作固体はそれを見て演技だと、見抜いたかも知れない。

「……ただその言葉を聴いて彼女は涙を払って言ったのだ。」

「^{オーバーライン}不可領域……？」

「……何だよ？」

一拍置いて。やや残る悲しみの感情を押し殺して。

「——……ありがとう」

#・5 ありがとう（後書き）

のんびりほのぼの回って感じですかね。

チョーカーも付けて弱体化しましたし、ラブコメ的なモン書けましたし満足満足w

前までのリメイクつつてもリメイクというより誤字訂正・追記みたいなモン——書いてたからやっとな本遍更新。そして、一章の完結ですね。

前書きと題名も変わりましたので。

「アクセス数が4000突破してビビっていますww」

駄文作家——刻^{とけ}驅^う

とある小説の登場人物——不可領域へオーバーライン（前書き）

キャラクター説明。

章末に、題名の様にして一人ずつ紹介してゆきます。

「今回は俺の様だなあ……」

ツンデレ超能力者（レベル5）——オーバーライン不可領域

とある小説の登場人物——不可領域へオーバーライン

オーバーライン
不可領域

年齢16歳。身長168センチの少年。本名は翡翠恭^{ひすいきょう}。

能力により必要以上の紫外線を消すため、白い肌に白に近い灰色の髪。紅の瞳をしている。暗部に所属していたためか目つきは悪いが、中性的で整った顔立ちをしている。

基本的に冷静沈着で冷酷無比な思考を持っている為、自分以外の人間に興味関心があまりないため、攻撃を仕掛けてきたり、実験のためであつたりすると、その圧倒的な能力を持って殺害する。だが、それ以外であれば見逃したりはするという余裕を持ち合わせてはい

る。
上条との戦い後は、本質こそ変わらないのだがそれでも性格自体は丸くなり、会話が楽しいと思ったり、他人に対し興味関心を抱き始める。

幼少時、能力のため研究所を転々としたり、暗部に所属させられ上の言うままに人を殺害していた。いつの間にかそれ自体が存在意義^{クリアワー}となっていたが、上条との戦いの後は、第三次製造計画の試作固^{クリアワー}体とその身の回りを護る、という事が存在意義の様になる。

能力

オーバーライン

不可領域：本名の変わりとすらなっている能力名で、実際は物質^{チェン}操作の最高位能力。

分子レベルでの加速や停止を促したり、分子分裂などを行ったり出来る。常に、『消失』が展開しており害意を持つ物質などは『消失』する。

反物質演算と呼ぶモノで、害意がなくても不可領域自身^{オーバーライン}が任意的に消す事も出来る。

物質の質量、密度、性質などを自由自在に変えたり、酸素などをまったく違う炭素などへと変えたりも出来る。

反物質にした時に出る中間子を用いた中間子レーザーや、光子を反射させて光子自体が持つ運動エネルギーを推進力へと変えて高速移動、攻撃したりも出来る。

分子レベルでの加速が出来る事から、電子やその他の粒子を加速させての荷電粒子砲を撃つたりも出来る。

服装

第一章

灰色のロングTシャツにベスト、足元に及ぶ左右にスリットの入った腰巻、ぶかぶかのパンツ。レザースニーカー。

第二章

灰色のロングTシャツ。長袖ワイシャツ。ベスト、長い裾幅の広いスラックス。レザースニーカー。

長袖ワイシャツは第二ボタンまで外され、ベストのボタンは全開。スラックスのくるぶしの少し上の辺りにベルトを巻いてある。

髪型

第一章

前髪は鼻にかかる程度。サイドと後ろ髪は肩まで伸びてある。灰色の髪。

第二章

ロシア編の一方通行の髪型より長めで、サイドはそのまんま肩まである。

CV

小野大輔 おの だいすけ

(デュラララ：平和島静雄)

or

三浦祥朗 みづら ひろあき

(ゴッドイーターバースト：18番ボイス)

とある小説の登場人物——不可領域へオーバーライン（後書き）

声優さんは知ってる出演作での奴です><
物語が進むたびに追記していきます。

#・6 新たな始動（前書き）

「……ぷっ、くくく」

常盤台の冬服の少女——クリアワースト試作固体

「……に、似合ってるわよ……ふふっ」

美人研究者——せだにあけいろ瀬谷朱色

「——ぶち殺し確定だなクソつたれがああああああっ!!」
不良バーテンダー——オーバーライン不可領域

#・6 新たな始動

——病院という施設には入院患者のための風呂場がある。

季節外れというか、そろそろ衣替えではあるが、ベージュ色のブレザーを長袖のブラウスの上から着た、紺系チェックの膝丈プリーツスカートはサードシースンを穿いた第三次製造計画の失敗作、試作固体はお風呂のドアに背を預けていた。美少女といえる容姿に、大人びた雰囲気まとが纏わり可愛らしさの中に色気すら感じさせる。さらに、前面へと少々強すぎる自己主張をする胸はベージュ色のブレザーを押し上げている所が色気をさらにかもし出していた。

そんな彼女は、扉越しに中に入っている患者へと声を掛けた。

「どう？ お湯の加減っていうものはー？」

「……シャンプーって目に入ると痛いモンなんだな」
クリアワースト

試作固体の質問はお湯の加減なのだが、それすら無視して自分が今実感している事を話してくる患者の言葉を聴いて噴出した。

「ぶははははっ！！！！！」

「て、テメエ……風呂出たらぶち殺す。いや、一回だけじゃダメだ。両手足縛り上げて動きの取れねえ所を叩きのめしてやる……っ！」

悪意の籠こもるその声は、どこか痛みに耐えるような感情が入り込んでおり、その言葉が余計に試作固体のツボへと急所攻撃した。
クリアワースト
クリティカルヒット

爆笑が怒号を生み、怒号が更なる爆笑を呼び、その爆笑がはたまた怒号を呼ぶ——その繰り返しだった。

「くくく……涙が止まらないぜ……それより湯加減聞いてるんだけどお」

まだ、ぶつ、だのくくつ、だのと聞こえてくるが患者こと、白に近い灰色の髪を持つ灼眼の少年、不可領域は答えた。
オーバーライン

「いや、普通だ……っつか、このチョーカーは防水加工されてんだな。濡れても壊れねえぞ」

「濡れて壊れるって、いつの時代？ 学園都市の製品が濡れて壊れ

るなんてあり得ないでしょ？」

確かにそうだな……と、いう呟きを試作固体は聞いた。クリアウースト

防水加工がされてない機材や道具なんてティッシューパーやタオルぐらいであろう。学園都市の製品はすべて防水加工が施されている為、濡れても壊れる事なんてまずあり得はしないのだ。

電極を内臓するチョーカーも同じ。そんな電極を内臓したり、脳波の波長を合わせる変換器なのである。そんな精密機械を通り越して緻密な機械なんて防水加工されてなかったら雨を数滴受けたただけで故障するだろう。

「そついやさあ……体内組織に伝える電気信号まで加速促せるとか反則だね。メチャクチャな速さで髪の毛生えたじゃん」チート

『そつは言っても、頭蓋骨の亀裂までは完全に修復は出来ねえがな。せいぜい出来るつつたら、相手の電気信号を停止させたり、思考を加速させたり、身体能力強化したりしか出来ねえけどな』

「いや、ミサカにとつたらそれ十分な反則だと思うんだけど」チート
そこまで知った事じゃねえな。

くだらない討論を続けた、その数分後に不可領域は湯船から出たのであった。オーバーライン

とある科学の不可領域オーバーライン

「——何だ何だよ何なんですかあつ！！？ この服装はああああああああああつ！！」

とりあえず、風呂場の横にある着替え場で絶叫が響いた。オーバーライン

カーテンを勢いよく開けると目の前で、不可領域の服装を見てごろごろと地面を腹を抱えて笑う試作固体がいた。クリアウースト

「ぶふっ……似合つて、るよ……不可領域……あはははははっ！！」
「！」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

「ちよっ、ゴメンって！？ だから、だからやめてっ！？」

オーバライン 不可領域は最早、呪詛じゆその様に殺害宣告をして試作固体へと近づき、とりあえず殺しまでは行かなくても半殺しぐらいにはしようと押し倒そうとした瞬間、風呂場へと入る通路から黒い寝間着の様なジャージの上に白衣を着た栗色の長髪の女性、瀬谷せだにあけいろ朱色がやってきた。
「一体どうしたの…… って、着たのね不可領域」
オーバライン

「……これしかねえだろおが。何だ？ 俺にタオル一枚で病室戻れって言いたいのか？ そんな事してみろ、その光景見た奴らの頭ん中に変態っていうイメージが付いちまうだろうが！」
オーバライン

まくし立てるが如く、瀬谷の言葉の上に覆いかぶせる不可領域。
彼の服装。それは——長袖のワイシャツの上に黒のベストを羽織り、その下はややぶかぶかのスラックス。蝶ネクタイこそないが、バーテンダーの様なモノであった。

ただ、ワイシャツの第二ボタンまでは開けられており、中から灰色のインナーが姿を見せ、ベストは繋ぎとめるハズのボタンを全部外している為不良バーテンダー風ではあるが。

「……でもね、不可領域？」
オーバライン

「……何だよ」

「それしか替えの服買ってない上に、後十着はあるわよ……全部同じサイズで」

瀬谷の言葉を聞いた後、不可領域の怒号が風呂場に響き渡るのと、いつかの少年の「不幸だ」という悲鳴が響き渡るのは同時だった。

「いや……本当にごめんなさい」

「私からも謝るわ……」

「……………」

病院の一室。

そこには、ベッドの上に寝転がり掛け布団をかぶって窓側を向いて不貞寝る不可領域の姿と、それに向かい平謝りをする美少女と美

女の姿があつた。

とりあえずいつまでも怒っていては何もないので、不可領域オーバーラインは盛大に息を吐き出すとのそのそと起き上がる。

「……しゃあねえ。顔上げろ、鬱陶うつとうしい……これしか無えんだろ。後十着もあるんだ……ほかの服買つてたら金の無駄遣いだしな」

「あ、やつと怒るの止めてくれたー！ ミサカと瀬谷の粘り勝ちだねっ！」

「——勘違いすんな。次こんな事あつたら容赦しねえぞ」

「「心に留めておきます」」

二人の言葉を聴き、もう一度息を吐き出す。

一段落がついてから、頃合を見計らつたかの様に扉が開き、不可領域オーバーラインの命の恩人である力エル顔の医者、冥土返しヘンキャンセラが一本の棒のような物体を持ってやつてきた。

「……テメエか。何の用だ？」

「そんなに声色を変えて言われても反応に困るんだけどね……歩けるのかい？」

「いや……能力に頼つてばかりだったからな。今も廊下にある手すり便りに歩いてきた」

「だろうと思つていたよ……はい、これ」

冥土返しヘンキャンセラがもつて来たのは、真っ白なト字トンファアト字トンファアの様なモノだった。

それを右手で持つて、ボタンらしきモノを押せば長く伸び、伸縮式の杖がそこに現れた。長い棒から横に取っ手がついたような現代的なデザインである。

その杖をトンファアの様な杖を見て不可領域オーバーラインは、へえ、と感嘆の声を漏らした。

「わざわざ作つたのか？」

「とりあえずは、ね……伸縮式だから持ち運びも楽だろ？」

「確かに……ありがたく貰うわ」

医者に対して、素直なまでに礼を言う不可領域オーバーラインの姿を見て、今ま

で黙りこくっていた試作固体と瀬谷が驚愕に顔を染め上げた。

「あ、あの不可領域オーバーラインが礼を言ってるううう!!!？」

「……これは幻想ゆめよ、試作固体クリアリスト」

「はっ、これは幻想ゆめだったのか!？ 納得」

不可領域オーバーラインへ近づいてきた冥土返しフンキャンセラのその手からすぐさま杖を手に取ると、二回振るう。

ガンゴンっ！ という鈍い音と、冥土返しフンキャンセラの苦笑と声が響く。

「死ぬなよ……死なない限りは助けてやる」

かつこよさげな台詞を吐き捨てて、扉を我関せずと言った感じで出て行く冥土返しフンキャンセラ。

「ミサ力達、重症前提の台詞!？」

「当たり前だろ……？ 今から俺の独壇場だボケ」

そう言つて、杖を振り上げようとして——プルルと、不可領域オーバーの携帯インが着信した。

「チツ……命拾いしたな」

言いながら、杖をシートへと置いて携帯電話の画面を見れば、見た事すらない番号が並んでいた。

その番号を見た瞬間、なぜだか分からないが懐かしき感覚がした。それは——暗部で働いていたところと同じ、あの感覚。

まるで不可領域オーバーラインが携帯を手に持ち、怪しげに警戒しているのが分かっていくかの様に鳴り続ける携帯を右手で持ち、ベッドから降りて杖を突く。

「少し話してくる」

「判ったわ」

不可領域オーバーラインの言葉を聴いて瀬谷は静かに頷く。

それを一瞥いちべつすると、扉を開けて廊下を少し歩き、電話に出た。出るの遅くて待ちくたびれたわ……」

「いきなり早々グチャグチャ抜かしてんじゃねえボケ。用件を吐け」
「聞いた通り口が悪いわね……別にかまわないわ」

大人びた雰囲気の声。感じから女子高校生であろうか。

沈黙が続き、電話の相手が口を開いた。

『私の名前は結標^{むすじめ あわき}淡希』

ひとつ自己紹介をして、一拍置く。

『——^{レムナント}残骸^{レムナント}って知っているかしら？』

#・6 新たな始動（後書き）

とりあえず、結標さまのご登場なり。

さーで、べったべたな暗部のストーリーから少し切り離すか。
とりあえず次回はあれですよ……話に入っていきますよ。

「明日まで台風続くかなあ……ブルブル、警報が六つも」
小心者の作者——刻^{ときめ}駆

7 戦いの火蓋（前書き）

「今回短くねえか？」

本名を嫌う少年——
オーバーライン 不可領域

#・7 戦いの火蓋

とりあえず、だ。正体不明の結標淡希^{むすじめ あわき}という名前の女の依頼を受けた、というのが結論だった。

「しっかし……^{レムナント}残骸、ねえ……詳細は聞いてねえが名前からするに何か重要なモンだろうな」

やる気なく、^{クリアウースト}試作固体と^{せだに}瀬谷がいなくなった病室にあるベッドの上でポツリと呟く。

右手でチャージャーを叩いたりスイッチを触つてみたりして暇を潰す。

どうも、^{アイツら}二人がいたらでいたで騒がしいがいなかったらいなかったで、どこか寂しい様な変な気分になる。

一度息を吐き出すと^{オーバーライン}不可領域は寝転がる。

依頼の現地時間は五時間後。三時間は自由に出来る。

学区を移動する——以前、金を払った——もとい、奪い去ったが正しい——黒の大型バイクに乗るのだ。一時間もあれば着くであろう。実際、二時間もあればのんびり歩いてでも行けるのだがその間、杖を突いて歩きまわるといのは、このチャージャー^{ハンデ}が出来てからかなりキツイモノがある。能力が随時使えるあの時であれば、光子反射を使つてすぐに着く事が可能なだろうが……

過去の話だ、と思考を断ち切ると不可領域は両腕を頭の後ろで組み、そこへ頭を乗せて瞳を閉じた。

(……………久しぶりの匂いだ……………だが、嫌な予感がする)

ぼんやりと、思考するも本能的欲求というものであるうか——
眠たさにはかなわず、ゆつくりと^{オーバーライン}不可領域の意識は闇の中へ堕ちた。^お

とある科学の^{オーバーライン}不可領域

現地時間一時間前——そこには、建設途中のビルがあった。八

月三十一日、ここで鉄骨が崩れたりと事故が起きたらしい。壊れて障害物となった鉄骨を取り除き、残った部分の強度を念入りに検査して、ようやく組み上げられ始めたらしい。

だが、その建設途中のビルは戦場と化していた。

ビルの入り口の手前にあるマイクロバスが横倒しになっており、中には誰もいないがガラスが割れて内装が舞い飛んでいる。

乗っていたであろう人々はみんな、建設途中のビルの中へと飛び込んでいる。そこかしに突き刺さっている鉄骨が少しでも、盾になると願って。

大小合わせて三十人近い男女がビルの中に立てこもっているのが、オーバーライン不可領域の目に飛び込んでいる。銃で武装している者もいれば、学園都市の能力者も少なからずいたりしている。

とりあえず、携帯の履歴りれきから最新の電話番号を見つけるとその番号へと電話を掛けた。

『もしもし？ 今どこにいるのかしら？』

「マイクロバスの近くだ…… 依頼が始まってる様でなにより、とりあえずどうすりゃいいんだ？」

『そうね…… 今私も戦ってる所だから、ビルの入り口に来てくれなにかしら？ ああ、後携帯のライトを付けて腕を振ってくれたら嬉しいのだけど』

「愉快的ファンサービスでもやれってか？ ハッ、下らねえ…… まあ、しゃあねえか。依頼受けちまったしな……」

『素直なのね』

「余計なお世話だボケ」

通話を切ると、左手で杖を突きながら携帯のライトを出しビルの入り口へと行く。

目の前で、誰かは分からないが電撃が飛び交っている所を見ると、エレクトロマスターどうやら電撃使いらしい。

そんな事を考えながら、指示通り、軽く携帯を振って——一秒も経たない間に不可領域オーバーラインは自分の体が浮く感覚を覚えた。

そして、気が付けば鉄骨の上に立っており、右横には赤髪を頭の後ろで二つに束ねてまとめた少女がいた。服装は学校の制服であるが、冬服。青い長袖のブレザーの袖に腕を通さずに、肩に掛けるだけでボタンすら留めていない。ブレザーの下にブラウスらしきものは見えない。上半身は裸で、胸の部分に薄いピンク色の、インナーの様に見える布を包帯っぽく巻いてあるだけ。腰にもベルトがあり、スカートを留めるためではなく、見た分単なる飾りの様だ。革ではなく、金属板をいくつも合わせて作ったタイプのベルトで、ホルダーらしき輪があり、長さは四十センチ強、直径三センチの黒い金属筒だ。軍用の警棒にも使える懐中電灯であつた。

その少女を見て、確信する。彼女が、結標淡希^{いらいにん}であると。

「初めまして、と言ったところかしら？ まあ、そんな自己紹介する時間なんてないのだけれど……」

「安心しろ、お前と馴れ合うつもり何ぞ毛頭ねえ」

吐き捨てながら携帯をポケットへと突っ込み、その空いた右手の細い指を首もとのチョーカーへと突^はつ込み、その空いた右手の

(相手は電撃使用^{エレクトロマスター}いつて所か。フルでの能力使用時間は十五分と持たねえな)

通常モードでは二日でバッテリーが切れる。通常モードで既に十時間ほどいるため、実際能力使用時間はよくて十分。悪くて八分程度だろう。

そこを配慮して能力を使用するとすると、せめて三分は残さなければならぬであろうか。

「それじゃ、頼んだわね……私は逃げるから」

「あーあー、判った判った。高みの見物でもしてろよ……」

その言葉を聴いた結標は、キャリアケースを引きずりながら闇へと消えていく。

その姿を見てか、数メートル下で紫電を飛ばす電撃使用^{エレクトロマスター}が怒号を上げた。

「逃げんじやないわよっ！！それがどうなるか分かってやってる

の!？」

「——ほざくな三下。ギアアギア喚きやがって、口ん中突っ込むぞコラ」

「いきなり現れて随分とした物言いじゃない……後悔しなさいよ、私を敵にしたって事を!!」

ギユバツ! と轟音を上げて電撃の槍が空気を炸裂させた。

灰色の髪 of 少年へと向かう雷槍それを細くした紅の瞳で見ながら、首元から音がした。

カチリッ——右手の指が確かな感触を伝え、その音と共に雷槍は音も無く消滅した。

「なっ……!？ 私と同じ電撃使い!？」
エレクトロマスター

「そんなチンケな能力と同じにすんじゃねえよ屑能力者が」

右手を突き出せば、そこから一筋の光線が軌跡きせきを作り、電撃使いの近くへと突き刺さり、地面の砂を融解ゆうかいする。

首元から音がした瞬間から、そこにいたのだ、

「悪いな……こっから先は俺の領域だ。無様に退場して貰うぜえ」

健在していた。そこに学園都市準最強の超能力者（レベル5）が——己の能力の片鱗へんりんを見せ付けて。

7 戦いの火蓋（後書き）

とりあえず、今日は臨時休校というわけで一気にキャラ設定含め四話上げました。

私の所は、和歌山なので今日、明日は台風直撃コース……臨時休校かつ停電でなければ明日も投稿します。

今回は非公式の超能力者（レベル5）vs公式の超能力者（レベル5）です。

がんばりますっ。

「ふああ……ネムネムだなあ……」

一年半の作家暦の高校一年——ときほしり刻駆

#・8 圧倒的力の壁（あとがき追記）（前書き）

「……やっぱり似てんな」

非公式の超能力者（レベル5）——オーバーライン不可領域

「それより、このビルどうなるの?。」

公式の超能力者（レベル5）——みさか みこと御坂美琴

#・8 圧倒的力の壁（あとがき追記）

謎だった。

紫電をいくつも飛ばす、それでも全て少年に当たったと同時に消滅するのだ。

同じ電撃使いであれば判る。エレクトロマスター同じ能力同士なので対消滅はするだろう。

だが少年は何と言った？

『チンケな能力と一緒にするな』と、暗闇のせいで姿が見えぬ正体不明の少年は言った。

舐められたモンね——ギリツと齒軋はぎしりを立てる。自らの赤みがかった茶髪からバチイっという炸裂音を響かせて雷撃が迸はちやひしる。

努力による努力を重ね、その上、自分は目の前に置かれたハードルは越えなきゃ気がすまない性質タチだ。その負けず嫌いの性格から、この学園都市の超能力者（レベル5）の第三位という地位まで築き上げたというのに——目の前の正体不明の少年は、得体の知れない能力で次々と能力を打ち消していく。その上、先ほどはわざとはずされたのであろう、少年の体のどこから奔はしった光線が、自分の足元の地面へと突き刺さり、砂などを融解とくしたのだ。

当たればどうなるかぐらい判る。当たった瞬間に、いとも容易く皮を焼き、筋肉を溶かし、流れる血液を蒸発させ、骨を貫くという事は。

（……手加減されてる……っ！）

悔しさのあまり、唇を強く噛んだ。ブチッという音がして少ししてから、口内全域に鉄分の独特の味が広がる。

体の奥底から電撃が迸った。全力を掛けて目の前に立ち塞ふさがる正体不明の能力者を粉々に打ち砕く——右手がスカートのポケットへと伸びていた。

（あんな実験が繰り返されるなら……私は犯罪者になっても構わな

い。それである実験が終わるなら……もうあの時みたいな思いはしたくないっ!!」

限界だった。右手の親指へと乗せられたひとつのコイン。

それはゲームセンターに置いてある安物のメダルだ。だが——そのコインを音速の三倍で飛ばせばどの様な威力が發揮されるであろうか？

「……白けるよなあ、依頼っつーのが、護衛何てよあ……電撃使いさんよあ？ 一言忠告してやるわあ」

どこまでも、少女を舐めきった声音で正体不明の能力者は告げる。実に気だるそうに、強制されたから嫌々面倒ごとをしているかの様な、やる気すら感じさせない声で。

少女の右手にある、少女の中でもっとも最強の攻撃を知ってか知らずか、挑発するようにして、能力者は告げた。

「どんだけ一人よがりの攻撃続けてもテメエが俺に勝てる見込みなんざゼロ何だよ。お前はがんばった、がんばったよ……だから、諦めて無様に引き返せ」

ブツッ。

何かが切れた。全身から流れ出る紫電が全て右手のコインへと収束される。

——イイン。耳鳴りにも似た小さな金属音。親指で跳ね上げられたコインは、放物線を描き、親指へと乗ろうとして、

辺りから音が消え、それと同時に指先から閃光が噴き上げた。

とある科学の不可領域

耳鳴りに近い小さな金属音を聞いた。灰色の髪を触りながら、今にも閉じそうなほどに細められた赤目が目の前の電撃使いが行おうとする行動を怪訝そうに見つめていた。

——ツツツ!!! 音が消えた、刹那、凄まじい電撃が辺りを支配し目の前の電撃使いの姿を映し出す。

赤みがかった茶髪に整った顔立ち、袖なしのサマーセーターの下に覗く半そでブラウスに、膝丈のプリーツスカート……ゴーグルも銃もない。だが、その少女は限りなく似ていた。

それはもう、遺伝子レベルで——シスターズ妹達に似ていたのだ。

オレンジ色に発光する光の槍がコンマ一秒ほどの速さで不可領域オーバーラインへと肉薄した。

その一撃を彼は知っている。

リニアモーターカーと同じ理屈で、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器かんさい。

それは、学園都市第三位の必殺技にして、常盤台中学の電撃姫の代名詞——とまわだい

——レールガン超電磁砲。

紙切れを裂く様にして、二十本近くの鉄骨を全て引きちぎり、銃を構えた男たちが弾け飛んだわずかな破片の煽りあおを食らい、薙ぎ倒なされていく、少女、御坂美琴の頭上を頭を狙う能力者の立っていた柱が失われ、真下へと呑み込まれてゆく。

全てを破壊し、破碎し、粉々に砕く最強であって最凶の一撃は一人ぐらい簡単に突き破り、その体に風穴をつくり、さらに爆進していきほかの鉄骨も引き裂くだろう。

だが、それは不可領域オーバーラインには赤子を殺すほどに易い攻撃だ。やす

御坂は思っていた。

レールガン超電磁砲は確実に、正体不明の能力者を引きちぎり、一瞬遅れて音が轟くとどろであろうと。

その予想は大きく外れる。

「——効かねえって言ってるのが聞こえねえのか三下」

それこそ音もなく、空気摩擦により膨大な熱量と何億ボルトという電気量から成される高層ビルを一撃で粉碎するほどの運動エネルギーを秘めた必殺技が跡形もなく、塵すら残さず消えうせたのだ。

そこに立っていたのは、かすかな光で見える白に近い灰色の髪を持ち、悪魔のような紅の瞳を持つ不良バーテンダーのような服装の少年が一人いるだけ。

「……くつ、ふざけないでっ！！！」

辺りの地面から漆黒の砂鉄の渦が作られた。一つ一つが振動し、それ自体も超電磁砲にこそ劣るが殺傷能力を持つ一撃。振動するために生まれる運動エネルギーは鉄骨さえ引きちぎる。

その渦が螺旋を描き、御坂の背後から不可領域へと放たれる。

「――、」

もはや無言で、その一撃を見ながら、引つかかった蜘蛛の巣を払うような感じで右手を振るう。

右手に触れた瞬間、砂鉄が引き裂かれる様に辺りへと霧散し、右手に触れた場所だけ消滅する。

「……あああああああああああああ！！！」

悲鳴にすら近い絶叫を上げて、一気に前へと前進し、引きちぎった鉄骨も操り、磁力で上空へと飛ばし、さながら流星の様に不可領域の一点へとコンマ一秒遅れで鉄骨を飛ばしていく。

外れた鉄骨が、不可領域の立っている足場である柱をくの字にへし折り地面へと叩き落す。そこへ、軌道補正された鉄骨が豪雨のように降り注がれる。

ギョゴツガガッ！！ 粉碎する音が響きわたり、砂埃が立ち昇る。

目の前は見ええないし、もしかしたら人間の形すら保てずミンチ状になったかもしれない。それでも、御坂美琴は止まる事はできない。「私の邪魔をするなあ！ 残骸があいつらに渡ったら実験がまた動き出すんだからっ！！ 誰も殺させはしないんだからあ！！！」

叫びが轟音を生んだ。

さらに電撃が生まれ、無意識のうちに握り締めていたコインを動作なしで弾き飛ばす。

超電磁砲レールガンが一撃、二撃、三撃と続く。まさに艦載兵器の速射。ビルが唸りをあげる。鉄骨が軋み出しているのだろう。

「……ハアッ……ハアッ……もう、立ち上がらないで……私の前に立ち塞がらないで……お願いだから……っ!!」

悲痛な声が、戦場に静寂を生んだ。

鉄骨の豪雨に、超電磁砲レールガンの速射——どんな能力者だろうが、ミソチを超えて塵になってしまふであろう。

それぞれが人に使えば一撃で殺してしまう凶悪な破壊力を秘めた物だ。しかもそれに、軍隊に一人で潰すほどの能力者の力が加わればどの様な惨劇を生むだろうか。

誰もが想像するだろう。その絶対的な力が何を生み出すのかわなくて。御坂自身も気づいてるハズだ。

たかだか一人のために人を殺せる一撃を何発も放ってしまった事に、それが惨劇を生むという事に、そして人を殺してしまったという事に。

「う……げえっ!!」

奥底から、吐瀉物としゃぶつが出てきた。地面へと音を立てて付着する。涙が零れ落ちる。

あの結標むすじめが持っていたのは残骸レムナントと呼ばれる物。かつて、何者かに破壊された『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の残骸。壊れて、朽ちてなお、莫大な可能性を残したスーパーコンピューターの演算中枢シリコンダム。それを修復すればあの悪魔の実験が、あの救った一万もの少女たちをまた研究者の無意味な研究のせいで殺されてしまう——あの『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画が繰り広げられてしまう。

それを粉々にしなければ——その考えが御坂を駆り立てたのだ。「——俺じゃなかったら死ぬ所だったっの……」

唐突に声が響き、砂埃が切り裂かれた。高らかな身分を持つ者が住民が闊歩かつぽするさいに端っこへとよけるかの様に、砂埃はかき消される。

声の方向を見れば、灰色の髪の少年がまさに無傷で立っていた。

「……三分もつかっちまった。まだ七分あるかもしれないが、この場合だと残り五分だと考えた方が正解だよなあ……」

いいながら、目の前の少女を見て、絶句し、青ざめた表情を浮かべるのを見て舌を打つ。

（……俺の周りには厄介事しか回り込まねえようだな……しかし、^{アイツ}結標をとめようとしたっつー事は残骸が何なのか知ってるっつー事だよな）

一つの結論を浮かべ、戦う気力を削がれた御坂の元へ、チョコレートのスウィッチを通常モードへ変えて歩みよる。

「近寄らないで……来ないで……今殺される訳には行かないのよ……」

「あー？ とりあえず何言ってたんだが判らねえんだが……俺自身、アイツに依頼されたから来たっただけなんだ。オイ、第三位」

「……何よバケモノ……」

「お前も同じだろうが……一つ交渉しねえか？ 悪い事は言わねえぞ」

「——条件を言いなさい」

交渉成功って所か、口の中で呟くと不可領域は切り出す。^{オーバーライン}

「俺はお前を殺さねえし、痛ぶる趣味もねえ。だが、交渉決裂となりゃあ、殺す……つまり、だ」

「早く言いなさいよ」

「そっ急かすな……俺はデメエを殺さねえ条件で、お前が知ってる^{レムナント}残骸の情報を全部渡せ。後、その残骸が引き起こすであろう事も全部だ」

その条件を聞いた御坂は、よく考えると静かに頷いた。

#・8 圧倒的力の壁（あとがき追記）（後書き）

さて、題名とおり御坂との圧倒的な力の差を叩きつけて交渉をたたきつけ終わり。

次回は、共同戦線って感じですかね。後、ちょっとした二人の会話も入れます。

レムナント
残骸編も後二話、三話かなあ……

「——今日も臨時休校ヒヤッハア——」
頭のネジが緩んだ学生作者——ときほし刻駆

～追記～

とりあえず、後二話で終わらせる予定のこの残骸編レムナントですが、この次の章がオリジナル編です。

オーバーライン
不可領域のちよつとしたやつで、キャラクターがいろいろと出てくるわけですが、キャラ考えるの面倒くさ——げふんげふん。時間がかかるので、能力と共に感想にて書いてくださればうれしいかな、とか。

五人必要なんで。いや、別に絶対ほしい訳でもないんですが——
——感想をちゃんと書いて（少しでも構いませんけど、多い方が……）
キャラ設定を書いて頂ければ、気に入った能力などがあれば使わせて頂いたり、もしかしたら違う人と違う人から能力とキャラ設定だけ抜き出し独自設定も盛り込んだり——などとしますので、心が広い方！ 私のような駄文作家に、キャラ書いてやんよっ！ って方はお願いします！

キャラの書き方

名前：

能力：

年齢：

性格・口調：

容姿・服装：

詳細：

詳細の書き方で、もしかすれば^{オーバーライン}不可領域や原作キャラとの絡みが
多くなったりするかもです。

あ、送られたキャラは生存か死亡かは判りませんのでそこら辺ご
注意を。

「ミサカが思うに、これは送られて来ないと見たね」
出番のない失敗作^{ミス}——試作^{クリアワーク}固体

#・9 力量変換へベクトルチェンジ（前書き）

「おーおー、伏線じゃねえか」

残酷無比な超能力者（レベル5）——オーバーライン不可領域

「主に戦闘部分だけどねっ！ ってゆーかミサカの出番無くないっ
!?!」

出番のないヒロイン——クリアワースト試作固体

#・9 力量変換へベクトルチェンジ

学園都市公式の第三位、超能力者（レベル5）御坂美琴。みさか みこと

彼女との戦いの後、聞きだしたのは何者かに打ち落とされた『樹形図の設計者』の残骸を結標は『外』の組織と通じて、一ヶ月分の天気さえも絶対予測し、様々な実験などの結果を導き出す学園都市最高峰のスーパーコンピューターをもう一度組みなおすというモノだった。

さらに言えば、つい最近外国がシャトルの打ち上げを頻繁に行うのは宇宙圏内に漂う残骸の回収。レムナントそして、結標の持つ残骸が全ての残骸の中枢部分となる部分で、演算中枢と呼び、それが無ければ他の残骸同士を組み立てて作った所で、形だけの修復となつて、本当の修復とはならないという事。

そして、その修復した『樹形図の設計者』を使い、非人道的計画、御坂美琴のクローンである妹達を二万通りの戦場と戦闘により可能となる学園都市第一位、一方通行の『絶対能力進化（レベル6シフト）』。その計画である『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画をもう一度演算し直し、繰り返そうとしようとしている事だ。

（……今度もまた妹達が使われるとは限らねえ。それこそ、大能力者（レベル4）レベルで量産する第三次製造計画の連中達が使われるかも知んねえ……そうしたら、アイツは……）

試作固体も例外とならず、それも試作であり初期に製作された固体だ。もともと、繰崎に処分される事になっていた——つまり、最初の段階で殺されるかも知れない。

試作固体を護る、護り続けると決めた不可領域には耐え切れない事だ。オーバーライン

だからここで、自分を騙し、試作固体の事も知った上で騙したであらう結標を叩き潰し、試作固体の安全を確保する。クリアファースト
その為には、自分が死ぬなんて厭わない。いと

つい先ほど、聞き終わった後すぐに電撃使いという事もある為に
 チョーカーのバッテリーを充電してもらった。

長時間に及ぶまで結標と戦う気なんか毛頭ないが、もしかすれば、
 という例外があるかも知れない。

それに、

(……嫌な予感がするな)

全身が逆立つような、不思議な違和感。

それが、充電の理由。

「とりあえず、だ。俺はこれから、結標の逃げそうな退路を探す。
 テメエは勝手にしろ」

「私は……結標を探し出して、演算中枢をぶっ壊す！」

はっ……小さく鼻で笑う様に笑みを浮かべ笑う。

そうして、オーバーライン不可領域は横転したマイクロバスの横へと置いた大型
またがバイクへと跨りエンジンを唸らせた。

とある科学の不可領域オーバーライン

空気を轟かせ、漆黒のバイクは疾走する。

場所は学園都市の端。外部と内部を繋ぐゲートがある場所だ。

「……来るとしたらここだろうな」

呟き、バイクを停止させ路地裏の影へとバイクを移動させて、そ
 の場へと置くとゲート手前まで行く。

「——警備員は就寝の時間。その代わりゲートはちゃっかり閉じ
アンチスキル
 てやがる……要するに空間移動系しか超えねえ訳だ」

むすじめ あわき
 結標淡希という少女は空間移動系で最高の能力と呼ばれる、座標
ポイント
 移動の大力者(レベル4)だ。

簡単に移動なんか出来るであろうし、物体を移動させればこの分
 厚い壁となっているゲートでさえ紙切れの様に切断も出来るだろう。
 思考を張り巡らせ、結標が万が一に逃げた場合として留まる事を
 決意して——思考をかき消す様に、決意を切り裂く様に上空から

狂笑が響いた。

「ギャハハハッ!!」

軽く舌を打ちながら、右横へと飛び込み受身を取りながら地面を転がる。灰色の髪が揺れる。

緋い瞳^{あか}を凝らしてみれば、先ほどまでいた自分の足場へと何者かが着地し、同時に地面に亀裂が入りクレーターの様に轟音を上げて凹んだ。

その何者かは、白髪なのか根元部分が白く、他の部分全てが金色に染め上げられており、ギョロギョロと不可領域^{オーバーライン}と同じ赤色の瞳が不気味に動く。

どこか獣を思わせる眼光に、ギラつく両耳の三連ピアス。赤、青、黄という信号機のライトの様な配色。赤く染め上げられたパーカーのチャックが全開にされており、下にはインナーも何も着ていない襲撃者の地肌が見える。黒のスラックスの右膝部分に切れ込みが入り、さながらダメージジーンズの様な印象を与える。裾を外に出してはいるが、素材から襲撃者の靴はブーツだと推測出来る。

「ヒヤハッ!! クハハハハ!! 俺の名前は、大方黒港九堤^{くろみなとくさげ}!

! よおろしくうう!!」

「——イかれてんのかボケ。気違い野郎は及びじゃねえんだよ三下。害虫は地面這い蹲^{つくば}ってゴミになっとけ」

「いいなデメエ! 大方気に入ったああ!!」

どこまでもイかれてやがんのかコイツ——思考を置き去りにするように、右手でチョーカーのスイッチを切り替え杖を放り投げる。首の関節を鳴らしながら、不可領域^{オーバーライン}は光子反射しようとして——

——黒港が地面を強く蹴り碎いた。

単なる脚力で出来る芸当ではない。こんな芸当を行えるのは学園都市第一位の一方通行^{アケセラレタ}のみだが、容姿がぜんぜん違う。

その上、あの一方通行^{アケセラレタ}はこんなにイかれてなんかいない。

能力は——何だ、と考えようとして黒港が叫ぶ。

「俺の能力はなあ、力量変換^{ベクトルチェンジ}!! ありとあらゆる力量を任意の力

量へと変えたり増幅して放出したり出来る、あの一方通行をぶち殺せる能力だ!!」

「手の内明かしやがって……救いよつのねえバカ、もしくは対策方法練られてぶち殺されるのが趣味なマゾ吉クンかあ?」

すでにチヨーカーの電極を切り替えてから三十秒は経った。

しかし厄介だ——言い返しながら不可領域は思う。あらゆる力量を変換されるなら、中間子レーザーなど打った所で運動量を違う力量に変換されたりして無効化されるのがオチだ。

それなら『反射』されてそれを『消失』する方が楽ってモノだ。

「……聞いたいてやるが、テメエの強度は^{レベル}何だよマゾ吉クン」

「大能力者（レベル4）だよ! どうだあ!? 同じ大能力者（レベル4）の結標淡希クウウン!!」

「……んだとコラ?」

今何と言った?

向こうは不可領域^{オーバーライン}と思つて攻撃してきたのではないのか? だが、今黒港は確かに言った。

大能力者（レベル4）だと。そしてあの座標移動^{ムーブポイント}の結標淡希である。

——ハハツ根つからのバカかよ。筋金入りだなあこりゃあ。

「何で俺を狙うんだ?」

「決まってるだろおお? ぶち壊された『樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者^{シリコ}』の演算^{ランダム}中枢なんざ持たれて『外』の連中に学園都市の秘密知られる訳には行かねえええだろおおがあああ!!!」

要するに、上層部もさすがの出来事に焦つてはいるらしい。

不可領域^{オーバーライン}は簡単に情報を聞きだせる黒港を鼻で嘲笑^{ちやうしょう}する。

「ボケ……相手をよく見て動け。テメエは今……誰をを相手して殺すだの何だの言ってるんだよ……ああ!？」

相手も何も見ず、勝手な判断を下し命を狙おうとするバカ相手にム力ついた。

青筋を浮かべながら、足元で光子を反射させる。

「ヒヤハハハッ！！ 楽しい芸当もってんじやねえーの結標エエエ！！！！」

足元に掛かるベクトルが全て増幅され、黒港の足元が爆ぜた。急速し、同時に瞬間的に詰まる二人の間。

一気に黒港が拳を振り上げ、不可領域オーバーラインを叩き潰そうとするつもりか、大振りで地面へとたたきつける。

それを横へと光子反射で避ける。先ほどまでいた足場を見れば、全ての運動量を熱量へと換算し、さらに増幅した様で、ドロドロにアスファルトの道路が融とけていた。

相手は全力量を任意の力量へと変換し増幅する能力。

自分はあらゆる物質を変換する能力。

そこまで考えて、勝算が浮かんた。

「オラオラオラアアアああああッ！！ 大方逃げてばつかじゃねええかよおお！！ 俺を楽しませて見るよ、結標エエええええええええッ！！！！」

ありとあらゆるエネルギーが運動エネルギーはたまた熱エネルギーや電気エネルギーなどに変わり、増幅され放出される。

紅あかと紫電むらさきが空气中に飛散し、幻想的にさえ見せるその一方的に見える攻撃。

不可領域オーバーラインはそれを見ながらも、すいすいと余裕そうに避けている。不意に避けながら、ベストの内側へと右手を突っ込む。その右手から出てきたのは明らかな重量感を持つ白い重量級リボルバー。

弾装を回転させる。自然と止まったのを確認すると、黒港へと向けてハンマをたたいた。

ガンッ！ 明らかな重みを伝える衝撃音が響き、螺旋状に弾丸が黒港向けて飛んでゆく。

「大方舐めてんじやねえええだろおおなあああああ！！！！？」

弾丸は黒港へとぶつかろうと一気に距離を詰める。それを右拳を振り上げ運動エネルギーを自らの運動エネルギーへと変えて破碎しようとした所で、拳と弾丸の距離が一センチ程度になったところで弾丸が消滅した。

「らああああ…… あああ？！」

忽然と消えた弾丸に驚愕を浮かべながら、勢いの止まらない右拳が大げさに振られ、アスファルトの地面を轟音を上げて砕いた。

そのまま、右拳を引き抜こうとして——黒港が砕けたアスファルトの瓦礫の上へと膝を付いた。

「がつ…… ぐうつ、はあ！？」

「オイオイ、威勢の良かった割には何だよその様ア！！」
オーバーライン
不可領域が一気に加速した。

右手のリボルバーの引き金へと人差し指を掛けながら、左足を一気に振り上げ地面へと振り落とした。

足元で一気に光子の束が反射され、莫大な運動エネルギーが放出され地面へと放射状に亀裂を加える。

一瞬で黒港の足場が崩れ、地面へとたたきつけられる。

息が出来ないのか、喉を右手で押さえながらもだえ苦しむように左手で空気を仰ぐ。

「ヒヤハハッ！！ いいねエ、その顔オ！ 面白エじゃねエかア三下アアアあああああッ！！」

一気に足を振りぬき、黒港の顔面を蹴り飛ばす。

その顔には強烈な痛みによる苦痛の表情と、いつもなら蹴り飛ばされる前に運動量を自分の運動量へと換算して攻撃が出来るハズなのにその演算が出来ないのだ。

「がつ…… ひゅうつ」

空気の抜ける様な声を上げ、五メートルほどノーバウンドで蹴り飛ばされ汚い地面を転がる。

それを追撃するかの様に上空へと飛び上がり、更に辺りの窒素を炭素へと変換。硬質化させると即席足場を作り上げ悶え苦しむ黒港

をニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべながら嘲笑う。

「何だよ何だ何ですかア！？ 大口叩く割には無様な姿晒してくれンじゃねエかよオ！！」

一気に足元の炭素がダイヤモンドへと変換される。大粒のダイヤモンドを光子反射により光子の持つ運動エネルギーを与え、弾丸の様に飛ばす。

「がっ……ハアアッ！！ ぶっ殺してやる…… 大方どんな手え使ったかは知んねえが、ぶち殺し確定だ結標えええええ！！！！」

ダイヤモンドを壊す様に、右手を横薙ぎに振り払って——無数のダイヤモンドが鈍い煌きへと姿を変える。

ガゴツという音と共に右手が振りぬかれ、鈍い煌きが急速に歪み始めた。

「——知ってるかア？ マゾ吉クン。アルミつつーのは、重力子を加速させりゃ爆弾になるンだぜ？」

「——ツツツ！！」

喉が干上がった。

刹那、爆音が轟音を呼び、閃光が熱波を呼ぶ。

無数のダイヤモンドは、それ単体がアルミとなり一瞬で重力子を加速させられ無数のアルミ爆弾と化し、一瞬で一帯を閃光と熱波で包み込み黒港の体を巻き上げ吹き飛ばした。

ゴガアアッ！！ 激しい音を上げて、空中を舞う黒港の背中が高層ビルの一角へとぶつかつた。慣れない激痛が背中から全身を支配し、腹の底からこみ上げる粘着性の赤黒い血塊と吐瀉物の混じったモノが吐き出され、地面へと付着し、ずるずるとビルから地面へと加速し叩き落とされた。

「アハハギャハハハギャハハアッ！！！！」

笑い嗤う。

それこそ狂った様に、どこかのネジが吹っ飛んだように。

黒港の姿を見て、かつての冷酷無比の非公式の超能力者（レベル5）がそこに現れた瞬間だった。

中間子レーザーが黒港を襲う。一気に右肩へと閃光が奔り、ビルごと肩を抉り取った。

「がっ……ごああああ!!?」

ひたすらに絶叫を上げる黒港。

その顔面へと、光子反射も何もないただの右足が振り下ろされ、ぐりぐりと踏みにじられる。

「オイオイ……… どんだけ三下だテメエ? つうか、ホントにテメエ雑魚だわア。俺の相手になる価値すら無エじゃんかよ」

既に力量変換ベクトルチェンジの能力は解析済みだ。

かの学園都市の第一位は任意でなくとも『反射』が可能である。だが、この力量変換ベクトルチェンジは『任意』でなくてはその力量を変換したり、増幅して返したりなどと言う芸当は無理だ。

現在黒港は、突然の呼吸困難や、アルミ爆弾による爆風などによるダメージなどで演算がまともにならない。そのため、『任意』と認識し、演算しても時間が掛かる為に力量を変換する事が出来ないのだ。

「とりあえずバカな三下クンに教えてやんぜエ……… テメエが呼吸困難に陥った理由だ」

それはとても簡単な事。

「いきなり消えたハズの弾丸つーのはなア、実質消えて無エンだよボケ。構築する物質ごと一酸化炭素へと変換して、テメエに吸い込ませたわけだ。一酸化炭素は酸素へと付着し、酸素を奪うつー性質を持つ訳だ。それを加速させちまえば、お前のいた一帯の酸素ぐれエ一瞬で無くせるンだよ」

オーバーライン
チェンジマター
不可領域の能力、物質操作が物質・物体を変換出来る距離は半径五メートル内。その中であれば、どんな物質でも変換出来る。

「がっ……… ぐうつ!？」

今だぐりぐりと、害虫の幼虫を踏み殺すように、ガムを地面へとこすりつける様な感じで踏みにじられる黒港が、左手で不可領域オーバーラインの右足を掴み、力量を増幅させその右足をへし折ろうとする——が、

「今のお前の状況で出来るのは『一点への任意的力量変換』のみだ。つつー事は、だ……他の部位への攻撃は簡単に出来る訳だが……テーマ分かってンのか？」

リボルバーが轟音を上げて火を噴いた。

だがその弾丸は一瞬で、消滅し——突然、黒港が血を吐き出した。それは、右足に掛かった瞬間に、全てを拒むように消滅する。

「トンネル効果って知ってんかアマゾ吉くん？　まア、俺は人為的に引き起こす事が出来ンだけだよ……俺の能力は分子分解まで出来るンだわ」

神からのお告げを待つ者へと告げる様に、だがそれは殺気を含んで。

「分子結合をある程度崩した弾丸は、質量保存の法則の影響で、ドンだけ分解しても質量はソンままだから、無数——幾数にもバラけた弾丸が霧散……つう事は、だ」

一拍空けて、眼球が零れ落ちそうなまでに驚愕の顔へと変えて不^オ可領域^{バーライン}を見る黒港。

その姿を見て、一層邪惡な笑みが薄く薄く、黒く黒く変わって行く。

「——砂粒単位でバラけた弾丸がさながら散弾の様に、体内にぶち込まれる訳だが……理解してくれたかなアマゾ吉くん？」

あア、それとオ——友達に話しかけるように気軽に、何の気もなく踵^{きびす}を翻しながら不可領域は黒港へと宣告する。

それは死の宣告。

「あア、それちなみに性質変えてンだぜ？　——『衝槍弾頭^{ショックランサー}』っていう弾丸があんの……知ってンよなア？」

刹那、黒港の内側からその肉体がグチャグチャに引き裂かれた。

#・9 力量変換へベクトルチェンジ（後書き）

にちゃあ！（2chでない。こんにちはである）

今回は、オリジナル能力の敵が出てきて一話で葬られるというモノ。

作中で能力の説明うまく出来るといいな……まあ、簡単に言えば一方通行の劣化能力って所ですかね。

ただ『任意』でなければ変換出来ない能力……設定上、一超能力者（レベル5）になれば任意でなくても変換できるようになるので、一方通行に普通に打撃を与えられるんですがね。

大能力者（レベル4）というレベルが彼の不幸って感じですかね。

そして、オーバーライン不可領域の能力の応用などが出てきましたね。

アルミ爆弾という介旅達、重力子加速の能力者顔負けの絶大的威力を誇っております。

更に物質透過。あちゃー、最強じゃねー？ なそこの読者諸君。

一方通行は十一次元上まで反射するんだぜ？ こんなモン反射されちまうぜ……反射された所で消失するから意味ないんですがね！！

あつ、オーバーライン不可領域の伏線張ってます。多分普通に気付くでしょう……

…それこそ、くろみなと黒港の口癖を取って、大方普通に気付くでしょう。

「土砂……土砂撤去しても上にまだともってるとかお前……学校行けなくねえ！？」

道路が土砂崩れで封鎖された体操部一員——ハヤ刻駆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342u/>

とある科学の不可領域《オーバーライン》

2011年8月7日03時26分発行